
魔王で吸血姫ですが勇者と旅をしています

本知そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王で吸血姫ですが勇者と旅をしています

【Nコード】

N8792X

【作者名】

本知そら

【あらすじ】

足を滑らせて学校の屋上から落下した僕『加志崎える』は、突如現れた『穴』に吸い込まれ、魂だけの姿となって異世界へと飛ばされる。

消滅しかけていた僕を助けてくれたのは『リーデ』という少女。吸血鬼の国『カメリア』を統治する姫であり、隣国からは『魔王』と恐れられる『吸血姫』だった。

彼女は僕の魂を自身に取り込むことによって僕の命を救う。何故か体の主導権を得た僕に彼女は、

「私、一度で良いから旅行してみたかったのよ」。

助けられた手前、彼女の願いを叶えることにした僕は付人の『テイルラ』と共に旅に出る。

その後、カメラリアを出て最初に訪れた町で、僕は『打倒魔王』を掲げる『勇者』と出会い、あるう事が彼を弟子にしてしまう。

これは『魔王』である僕を打ち倒すことを目標とする『勇者』を弟子にした僕が当てもなくぶらぶらと世界を旅する物語。

……え？ これって僕やられちゃうわけ？

主人公最強設定の性転換物（男 女）です。徐々に能力を解放していき、ゆくゆくはチート紛いなキャラになる予定です。

第1章 プロローグ

どれだけの時間が過ぎたのだろう。数日のようにも思えるし、数分のようにも思える。

どんなに目を凝らしても自分の手すら見えない、黒以外の色が存在しない空間。僕はその中をふわふわと漂っていた。

……漂っていた？ いや、それも疑わしい。なんせ自分の手さえ見えないほどの漆黒の闇。あまりにも暗すぎて右も左も上も下も分からないうから。地に足も付いていないし、平衡感覚なんてとうに失っている。

少しの気分の悪さと不安を抱えながら、じっとしたまま暗闇の中を漂う僕。

一応これでも最初の内はいろいろと試した。だがどれもこれも今の状況を打破するには至らなかった。むしろ不安を煽るだけだった。それにしても、どうしてこんなことになったんだろう。僕はただ学校の屋上で足を滑らせて落ちただけなのに……。

って、全然『ただ』とか『だけ』で済まされることじゃないって！ 屋上から落ちたんだよ！？ 死にそうだったんだから！

一人でボケツツコミ。長いことここにいるせいで頭が回らなくなってきた。

少し冷静に考えよう。とりあえず、あのまま地面に激突していたら僕は間違いなく頭の中身を大衆にひけらかしてぼっくり逝ってしまった（表現をマイルドにしてお送りしています）ので、今の状態はどちらかと言えばまだマシな方では？ もしあのまま地面にゴールインしていた場合、きっと学校の屋上の使用がPTAで問題となり、せっかくの生徒の憩いの場である屋上が僕のせいで使用禁止になっていただろう。そうなるとそれは僕の歴代ワースト一位の黒歴史となり、みんなに合わせる顔がない僕は卒業するまでは家に引きこもり、それがずるずると続いて、果てはニートに……って、

その時は僕死んでるから考えるだけ無駄か。あっはっは……。

で、僕って今生きてるの？

質問に答えてくれる人がいるはずもなく、僕の問いかけは暗闇の中に解けて消えた。

屋上から落ちたあのととき、僕は迫り来る地面との衝撃を覚悟し、けれども自分の最期くらいはしっかりと目に焼き付けようと、意味のない意地を張って地面を凝視していた。すると突然目の前に黒い丸い穴のようなものが現れて、僕はそれに吸い込まれるようにして落ちてしまった。

そして現在に至るわけだけど……もしかしてさっきの穴に落ちる一連の流れは死ぬ間際に見た幻覚で、僕はすでに死んでいて、ここが死後の世界だとか？

そうだとすると……なんて味気ない世界なんだ。四方八方暗闇のこんな世界で、次の転生まで待てというのだろうか。あんまりだ。あんまりすぎる。せめて暇つぶしにテレビだとか本くらい置いててほしいものだ。

『あなた、よくそんなのんきなことが考えられるわね』

ふいに声が聞こえた。それは小さく微かなものだった。

どこからだろう。

辺りをキョロキョロと見回していると、再び声が聞こえる。

『こっちこっち』

遠くで何かが光った。小さな小さな点のような光だけど、それは暗闇の中にいた僕には酷く眩しかった。

『あなたは自分が今どこにいてどういう状況か分かってるの？』

「それがさっぱり。なんとなく死後の世界かなあ……って考えてたところ」

声が出た。いや、出るかどうかなんて試してなかったけど。

『自分が死んでいるかもしれないのに、その落ち着き払った態度は呆れを通り越して尊敬すらするわね……』

光の強さが一瞬弱まった。なんとなく溜息をついているように見

えた。

「ところで見知らぬ人……人ですよね？」

『一応私は人間ね』

一応？ まあいいや。

「僕って死んでます？」

『半分死んで半分生きているってところかしら。今あなたは肉体を失い、魂だけになって、この世界をふわふわと浮いているだけの不安定な存在よ』

「ああ、幽体離脱ってやつですね」

『そう言われると酷く軽い感じがするのは何故かしら……』

そりゃ魂だけになったら重量的に言えばふわふわだと思う。

『そう言う意味じゃないわよ』

心を読まれた。この人実は神様じゃ？

『人間だってさっき言ったでしょ？』

人間。つまり超能力者というやつなのかな。そんな人とテレビ越し以外で初めて会ったよ。ごめんなさい。ずっと『胡散臭い』なんて思ってたごめんなさい。『スプーンなんて曲げて何の役に立つの？』とか捻くれたこと考えてごめんなさい。

『いえそんなことはどうでもいいから……あなた早くしないと死ぬわよ？』

痺れを切らしたかのように唐突に突きつけられた余命宣告。いやまあ実際痺れを切らしたんだろうなあ。全然話進んでないし。

『あなたがそんなこと考えるから進まないのよ』

ごもつともです。でもそんなあなたも毎回僕に付き合うのがいけな

『あなた死にたいの？』

「続きをどうぞ」

死にたくないの为先を促す。

『時間がないから簡潔に話すわよ』

「できれば初めからじっくり聞きたいです」

『いつそのこと死ぬ？』

「ぜひ手短にお願いします」

なんか楽しくなってきた。死にかけてるらしいけど。

『次ふざけたら、それはイコール死だと思いなさい』

厳しめの口調だけど、きつと彼女は最後まで僕を見捨てることはないんだろうなあと思う。なんとなく。

『このままだとあなたは後数分足らずで間違いなく死ぬ。もしあなたが自殺志願者ならそのまま死ぬのも良し。もし生きたければ……』
光が強くなった。眩しさで目が眩む。

『その光に触れなさい』

視力を取り戻したときには、光は一筋の線になり、僕のすぐ傍にまで伸びてきていた。

もちろん僕は考える必要もなくその光に触れた。

光のはずなのに、何故かそれは暖かった。

『あなた生きたかったのね』

「そりゃまあ、僕はまだ十六歳の取れ立てピチピチの高校生ですから」

『死にかけているのにピチピチなのね』

彼女がくすりと笑ったように思えた。

『でもいいの？ 次に目が覚めたら犬になっているかもしれないわよ？』

彼女の言葉に少し驚く。たしかに彼女は『元の姿で』とは言っていないかった。

でも……と考える。

「それならそれで犬畜生になって旅にでも出て、自由の身を存分に楽しみますよ」

『旅ねえ……。それもいいかもしれないわね』

「でしろう？」

『ふふ。まあ安心しなさい。ちゃんと人間にしてあげるから。ただ、元の姿、とはいかないけれど』

「常に前傾姿勢前向き思考の僕ならそれだけでオールオッケーです」
『そう。その言葉は本当?』

「はい」

どうせなくなっていた命だ。たとえ別人になって別の人生を歩むことになるうとも、生きていられる、それだけで十分儲けものだろう。

『後悔はしない?』

「はいっ」

力強く頷く。とは言っても彼女に見えているのかどうかは分からない。

『……分かったわ。じゃあ、少しの間我慢してね』

その声を合図に、光の線がぐるぐると僕を縛り始める。幾重にも重なった光の線が束となり、太い縄のようになると、僕をここから引きずり出すように強い力で引っ張られた。

感覚を失った僕でも感じるほどの強い衝撃を受けながら、少しずつ光の光源へと引っ張られていく。

その光は徐々に大きくなり、やがて僕を包み込むように全身を照らした。

その暖かい光に包まれながら、僕は意識を手放した。

第1話 えるとリーデ part 1

「んん……」

瞼越しに光を感じて目を覚ます。ぼやけた視界の先から暖かな光が降り注ぎ、優しい風が頬を撫でる。

目を擦りながら上半身を起こし、背伸びをする。

あの暗闇の中を漂っていたせいだろうか。少し頭がクラクラする。船酔いに似た気持ち悪さを感じながらも、今の僕は機嫌が良かった。生まれ変わったというか、脱皮したというか、そんな清々しい気分だ。

……ん？

少しずつ鮮明になる視界に違和感を覚える。それを確認するため、ぐるりと辺りを見回す。

そこは見慣れない部屋だった。壁や床はキラキラと光沢を放つ石（大理石のようなものだろうか）で敷き詰められ、備え付けられた家具や調度品には異様に凝った細工が施されたものばかりが並んでいる。よく見ると今僕が座っているベッドも三、四人は寝られるんじゃないかと言うくらい大きく、天蓋まで付いた高級感の漂うものだった。

「な、なにこの中世ヨーロッパの貴族の寝室みたいな部屋は……？」
当然の疑問を一人呟く。

「やつと起きたのですか？ もうお昼ですよ？」

「ひやつ!？」

誰もいないと思っていたところに突然声を掛けられ、心臓が飛び出そうなほどに驚く。反射的に声のした方を向くと、そこには少女が一人、僕に背を向けて立っていた。

彼女はカーテンを開き、大きな窓を開け放す。薔薇の良い香りが窓から流れ込んでくる。

「ほら、こんなに良い天気なのでから、久しぶりに散歩に出られ

てはどうですか？」

少女が振り返り、僕に微笑みかけながら言う。

「え、あ、う、うん……」

どう答えて良いか分からず、とりあえず頷いておく。

「？ どうしたのですか？ いつもと様子が違うようですが」

そんな僕の様子に怪訝な顔をする少女。

……えーと。誰？

失礼だとは思いつつも彼女を凝視する。

少女はフリルがたくさん付いた黒いワンピースにエプロンをした、所謂メイド服を身に纏っている。長い黒髪は大きなリボンで結び、ポニーテールにしている。身長は一六〇あるかないかと言ったところで、歳は十代中頃から後半、僕と同じ年くらいに見える。

ここまでの説明で彼女の姿を想像すると、きつとそれは日常的に見慣れた生粋の日本人になるだろう。だが、金色の瞳が彼女を日本人ではないことを伝え、そして頭に生えた狐のような長い耳が彼女を『ただの人』ではないことを訴えていた。そして同時にその事実、今僕がいる世界が元いた僕の世界とは違う世界だということを如実に現わしていた。

いやまあなんとなく分かってたよ？ あの神様みたいな女の子に助けられた辺りからなんとなくは。

部屋の内装、とりわけシャンデリアに立てられた蝋燭を見て、この世界が元の世界よりも文明が遅れていることを知る。

それで、今の僕は一体どういう状況？ この少女は何者？ 口振りから僕のことを知っているようだけど、それはなぜ？

……だめだ。疑問符が頭に浮かびすぎて知恵熱出そう。

「そんなにわたしの顔をじっと見つめて、何かあったのであぁ、そういうば昨日別の世界からいらした見知らぬ方と『同化した』のでしたね」

パンツと手を打ち鳴らす少女。また一つ疑問が増える。

「あなた様とはこれが初対面ということですね。それは失礼いたし

ました」

深々と頭を下げる。そしてゆっくりと顔を上げ、

「それでは自己紹介から。わたしは獣人のティルラ・ホリー。リーデ様のお世話係です」

スカートを摘み上げ、上品に挨拶をするティルラさん。

お世話係……ってことは、これが噂のリアルメイドさん？

メイドさんなんて人を初めて見た僕は少なからず感動する。

こんな可愛い女の子がメイドだったら毎日楽しいだろうなあ、なんて下世話なことを考える。

ところでリーデ様って誰だろう？

「これからよろしくお願いします。リーデ様」

僕の心を読み取ったかのように、ティルラさんは僕に微笑みを向ける。

一応後ろを振り向く。もちろん誰もいない。

僕は自分を指差して、

「リーデ様って僕のこと？」

「はい。その通りです」

優しい笑みを浮かべたままのティルラさんがゆっくりと頷く。

……あれ？

僕は違和感に気付く。

「あー、あー」

やっぱりだ。声がおかしい。いつもより高くて女の子みたいな声だ。

気になって喉に手を当てると、あるはずのものがそこにはなかった。

……ん……。あー、なるほど。何故僕がこんなところにいるのか、なんとなく分かってきた。

学校の屋上から落ちたその後、暗闇の中で死にそうになっているところを見知らぬ女の子に助けられた僕は、彼女によって元の自分ではない『リーデ様』となって生き返った。おそらくは『昨日まで

のリーデ様』が『同化』というものをしたせいでこうなったのだらう。

うん。なるほど。そういうことか。

つまり今の僕は……

「鏡、ご覧になりますか？」

「お、お願いします……」

ティルラさんが部屋の隅から大きな姿見を持つてくる。僕はざわつく胸を押さえながら姿見を見た。

そこには触り心地の良さそうなネグリジェを身に纏い、絹糸のような銀色の長い髪をベッドに扇状に広げた、まるでおとぎ話に出てくる妖精のような少女が映っていた。じっとこちらを見つめる瞳は宝石のような青色で、小さな唇は綺麗な桜色をしている。透き通るような白い肌はきめ細かく、頬は化粧でもしているかのようにほんのりと赤い。手足はほっそりとしていて、触れば壊れてしまいそうだ。

年の頃は十代前半といったところだろうか。ティルラさんよりも一回りも二回りも小柄で、見方によっては小学生に見えなくもない。実際胸も『ある』とは言い難い慎ましさだし。

……と、他人事のように観察してみたけど、これが今の僕の姿なんだよね。

「はあ……」

自然とため息が漏れる。

いくらなんでも以前の僕と違いすぎる。真逆と言っても良い。

「どうしたのですか？　ため息なんてついて」

「人生山あり谷ありと言いますが、これはちょっと乗り越えるのは至難だなあ、と」

ティルラさんが「ああ」と呟き、

「心中お察します」

と眉尻を下げた。

ティルラさんが悲しんでくれるなんて思わなかった僕は慌ててし

んみりとした空気を打ち消そうとする。

「ま、まあ、あの時助けられていなかったら僕は死んでいたわけですから、それと比べると全然良い方ですよ。ちよっと以前の僕とは方向性が違うようですが、こんな可愛らしい女の子になれるのなら、これはこれで楽しいかもしれせんし」

出来るだけ明るく努めて言う。

『自分のことを可愛らしいって、ナルシストにも程があるわね……』
「!？」

暗闇の中で聞いた声を耳にする。頭の中で鳴り響くようなその声がどこから来ているのかと周囲を見回す。

けどティルラさんと僕以外そこには誰もいなかった。

「リーデ様おはようございます」

ティルラさんにもこの声が聞こえているのだろうか。でもどうして僕を見つめながら言うのだろう。しかも『リーデ様』って。

『おはようティルラ。今日も眠気を誘う良い天気ね』

「寝てばかりいると牛になりますよ？ 今日ほ気持ちのいい風も吹いていますし、久しぶりに散歩なんていかがですか？」

『そうね……。この子が良いなら私は良いわよ』

「本当ですか!？」

ティルラさんが僕の手を取り目を輝かせる。

「ではさっそく着替えの用意を」

「ち、ちよって待って！ この声は誰？ どうして頭の中から聞こえるの？ なんてティルラさんは僕の手を握ってるの？」

矢継ぎ早に質問をぶつけられたティルラさんが首を傾げる。僕の手は握ったままで。

「……もしかして、リーデ様から何も聞いていないのですか？」

リーデ様？ リーデ様って僕の事じゃ

『何も話していないわよ。この子がどういう反応するのか見てみたかったから』

「はあ……。またリーデ様はそうやって人を振り回す……」

「ね、ねえ。あなたは僕を助けてくれた人ですよ？ どこにいますか？ 姿が見えないんですけど」

クスツと笑い声が聞こえる。やっぱりそれも頭の中から聞こえた。『どこって、あなたのすぐ傍よ』

周りを見る。やっぱり誰もいない。

『もつと近くよ』

もつと？ もつとつてこれ以上近くは……ん？

ティルラさんと目が合う。ティルラさんはじつと僕を見つめていた。少しの微笑みを浮かべながら。

……まさか。

『そう。そこに私はいるわ』

あの時のように僕の心を読んだのだろう。この体の『本来の持ち主』であるリーデ様は嬉しそうだった。

そう。彼女は僕の中にいた。

『遅くなったけど自己紹介ね。私は吸血鬼のリーデ⇨カメラア。吸血鬼の国、カメラアを治める吸血姫^{きゅうけつひめ}よ』

鏡の前の僕が意に反してにこりと微笑む。薄く開いた唇の間から、キラリと光る鋭い犬歯が見えた。

第1話 えるとリーデ part 2

鏡に映る今の自分をまじまじと見つめる。口を嚙んだその姿は可憐な美少女と言っても差し支えない。けれど、「いー」と口を広げて見えるのは、噛みつけば痛いどころの騒ぎじゃなさげな鋭い歯が四本。その常人よりも発達した犬歯は獰猛な犬を彷彿とさせ、幼さの残る彼女には酷くアンバランスに見えた。

でもそれは『儚げな美少女』として見た場合の話。見方を変え、犬歯もちよつと自己主張の強い八重歯と思えば、これはこれで良いのかもしれない。

論より証拠と、ニツと歯を見せて笑ってみる。

小悪魔っぽくていいかも？

『人のことを悪魔って呼ばないでくれる？』

「え？ あ、いや、そういう意味じゃなくてですね……ところでリーデ様」

『リーデで構わないわ。もうあなたは私なのだから遠慮は無用よ。もちろんティルラにもね』

と言われて「はいそうですね」といかないのが小心者の僕なんですけど。

『あなたのどこが小心者なのよ……』

ごもつともです。では……

こほん、と一つ咳払いをして気持ちを切り替える。

「ねえリーデ。今の僕は吸血鬼なんだよね？ やっぱり日光に弱かったり、にんにくや十字架が嫌いだったりするの？」

『日光に弱い？ なによその脆弱な生き物は？』

「いや、世間一般的な吸血鬼のイメージを言ったただけだけど……」と、そこで僕は思い出す。ここは僕のいた世界とは違うことを。

『ふーん。あなたの世界の吸血鬼は弱点だらけなのね。よくそんなことで生きていられるわね』

まあ空想上の生き物ですから。

『この世界の吸血鬼はそんなに粗末ではないわ。……強いてあげるなら、定期的に他人の血を摂取しないとろくに動けないことぐらいかしら』

「リーデ様の場合はピーマンも弱点ですが」

ティルラがくすくすと笑いながら言う。

『ティ、ティルラ!』

「申し訳ありません。リーデ様」

言葉だけなら真面目だけど、綻んだ口元はそのままだ。

「あ、そうだ。リーデ様」

「なに?」『なにかしら?』

僕とリーデが同時に返事をする。

「申し訳ありませんが、今のはリーデ様の方を呼ん……どちらもリーデ様だと不便ですね」

ティルラが顎に手を当てて軽く目を閉じる。

「……呼び方を変えましょう。リーデ様はそのままとして……」

そのリーデもどっちのことだろう。流れ的に僕ではなさそうかどうか。

「そういえばあなたの方のお名前を聞いていませんでした。お教え願いますか?」

「僕のこと?」

「はい」

あれ、言ってなかったっけ? たしか自己紹介の時に……って僕まだ自己紹介してないじゃないか。

『すっかり忘れていたわね』

そんな重要なこと忘れないでください。忘れていた本人が言えた義理じゃないけど。

「僕は加志崎える（かしぎきえる）。こっちの言い方だと、える〃加志崎になるのかな」

「える様、ですか」

呟いて思案顔をするティルラ。リーデも声には出さないものの何か考えているようだ。

僕はと言うと名前を様付けで呼ばれたことなんて一度もなかった。こそばゆさを感じてもじもじしていた。

やがて向き直ったティルラは、

「変な名前ですね」

『ええ、変な名前ね』

「くはっ！」

心に多大なダメージをこうむる。自分でも薄々感じつつ、友達からも何度が同じように指摘された名前だけど、まさか初対面早々に言われたのは初めだ。

「どうしたのですか？」

白々しい台詞を吐きながらティルラが顔をのぞき込む。

「い、今の言葉は、僕の心をえぐるランキングの歴代三位に入ったよ……」

『変なランキングね。ちなみに一位は？』

「『なんだ男か』」

あれは今でも覚えている。街を歩いていたら突然数人の男に声を掛けられて、しかもナンパだと僕が理解して、彼らに自分は男だと伝えるまで気付かれなかったんだよなあ……。

『ふーん。良かったわね、本物の女の子になれて』

「そ、それはどうなんだろう……」

別に元の僕に不満があつたわけじゃないので一概にそうとも言えない。

「何か誤解をなさっているようですが、わたしもリーデ様もあなたの名前を貶しているわけではありません。ただ、女性としてその名前は変だと言ったのです」

「あ、そういうことなんだ」

たしかに『える』は女の子には向かな……そうでもないんじゃないか？

「あなたのことはあなたの名前で呼ぶことにしようと思ったのですが……そうもいかないようです。先ほど言った女性云々という問題もありますが、それ以上に『える』という名前がこの国ではあまり好まれていないのです。以前このカメリアの国に攻め入った軍の将校に『エル』という方がいたので」

「そっか、戦争か……。それなら仕方ないね」

さすがに人の感情に関わるのあれば諦めるしかない。まあ自分の名前に執着があったわけじゃないからどうでも良かったんだけど。

だったら僕のことなんて呼んで貰おう。女の子っぽいものがないというのなら、そうだなあ……

「ですから、あなたのことはエルリーデ様とお呼びすることにします」

「うん、分かった。エルリー……はい!？」

驚きに目を丸くしてティルラを凝視する。

「エ、エルリーデって、良いのそれで？」

えるとリーデ。二つの名前を繋げてエルリーデ。そういうことだろう。

「はい。あなたにはリーデという名前にも慣れて頂きたいので」

「そ、そういう理由があるのならそれでいいと思うけど……リーデはどう思う？」

『良いんじゃないの？ 少なくとも『える』よりは断然こっちな』

若干なげやり気味に聞こえたけど、リーデもこの名前を良しと想っているようだ。

他に良い名前も思い浮かばないし……うん。

「じゃあこれからはその名前ですごく」

「分かりました。ではこれからはエルリーデ様とお呼びします」

こうして僕の新しい名前がエルリーデとなる。急造の名前のわりにはこの姿に合っている気がする。

「ああそうだ。ねえリーデ」

『なに?』

ふと僕は大事なことを言い忘れていたことを思い出す。

「ちゃんとお礼を言っただけだったからさ。ありがとう、僕のことを助けてくれて」

鏡に向かって深々と頭を下げる。ゆっくりと顔を上げると、僕は少し恥ずかしそうに笑っていた。

「別にお礼なんて良いわよ。私だって、無償であなたを助けたわけではないし」

無償で助けたわけではない？ リーデが僕なんかを助けることに何かメリットでもあるのだろうか。

「そのうち分かるわよ」

そう言った彼女の声はほんの少し悲しげだった。

第1話 えるとリーデ part 3

この世界にやってきて、早いものでもう一週間が経過した。

この一週間、僕はほとんど部屋から出ることなく、ティルラが持ってきた書物を読み漁っていた。

「最低限の知識は身につけてください」

そう言っで置いていったのは、どれも開くのを拒絶したくなるような分厚いものばかりで、積み上げれば天井に到達するんじゃないかと思うほどの量だった。その内容は様々で、このカメリアの国や世界各国の歴史及び地理、女性としての立ち振る舞い、そして『魔法』の詠唱法などなど。これらに目を通せば、この世界のことを広く浅く知ることが出来るとリーデは言っていたけど、ぶっちゃけ教科書、参考書以外で読んだものと言えば赤ずきんにまで遡るほど『本』と無縁だった僕には酷な作業だった。というよりこれだけ読んでも広く『浅く』だなんて言われてやる気が起きるはずもなく、どうせ一、二冊だけ読んで、あとは部屋のオブジェと化するのだろうと思っていた。

ところがいざ開いてみると、どれもこれも知らないことばかりで、僕は夢中になっで読み進めた。気づけば一週間足らずでティルラが用意した書物全てを読破したうえに、そのほとんどの内容を暗記していた。その事実気づいたときは驚愕したが、おそらくは『リーデ』となったことで、僕の趣味趣向が変化し、そして能力自体も『える』ではなく『リーデ』のものに取って代わったのだろう。そうでなければ、この僕が本に夢中になるなんてことはないのだから。

そんなわけで最低限の知識を得た僕は、今日初めて城の外へ行ってみることになった。

「なんかドキドキしてきた」

胸に手を当てると、心臓がいつもより数割増しで脈打っていた。着慣れたネグリジェから大きく肩の開いた青色のドレスに着替えた僕は、スカートを踏んでしまわないよう注意しながらゆっくりと廊下を歩く。

『堂々としなさい。あなたはこの国の姫なのよ？』

この頭の中から声が響いて聞こえてくる感覚にもだいぶ慣れた。ちなみにこのリーデの声は、彼女と同じ存在である僕と、常に傍らにいて、リーデから絶大な信頼を得ているティルラにしか聞こえない。……というより、リーデが僕達二人にしか聞こえないようにしているらしい。たしかリーデはこれを『精神魔法』と呼んでいた。

「一週間前まで庶民だった僕にそんなこと言われても……ところで疑問だったんだけど、どうして『姫』なの？ 普通『女王』じゃないの？」

「それがリーデ様のご希望だからです」

僕の斜め後ろを付いてくるティルラが言う。並んだ方が話しやすいのに。

『女王って響きが好きじゃないのよね』

……。

「え、それだけ？」

『それだけよ。他に何か理由が必要？』

ないけど、権力というものを垣間見た気がした。

慣れないパンプスでやつと城内から外へ出る。庭を通り城門へと向かう。

「お気を付けて行ってらっしゃいませ」

城門の傍らに立つ守衛さんが直立不動で敬礼する。

「えーと……ご苦勞様です」

ぎこちなく微笑み会釈する。その際に地面に付くほどの長い髪が肩にかかったので手で払い落とす。

『おお……』

……ん？

変な声が聞こえて守衛さんに目を向ける。何故か胃から覗く彼の顔は赤くなっていた。

「あの人もしかして風邪じゃないの？」

「違います」

前を向いたままのティルラが即答する。

「いやだつて顔赤いし……」

ティルラが小さくため息をつく。

「彼はリーデ様に見惚れていたのです」

「……な、なるほど」

納得。きつと僕だつて、こんな子に挨拶されたら緊張して声も出せないだろう。でもその対象が自分だということになんとも言えない気分になる。

城門を抜けて城下町へと出る。そこは部屋の窓からも眺めてはいけど、僕の想像していた吸血鬼の町とは程遠い、ごく普通の活気のある町並みだった。

「護衛とかそういうのはいないの？」

僕の周りにはティルラ一人しかいない。一国の主が自国とはいえ護衛もなしに出歩いて良いものだろうか。

「する必要がありませんから」

『むしろ邪魔とも言えるわね』

……？ まあいらないういうなら良いか。僕としてもこっちの方が緊張なくて済むし。

「あ、姫様だー！」

人通りのまばらな通りを歩いていると、通りかかった獣人の男の子が僕を見て声を上げた。

「姫様だつて？」

「本当だわ。リーデ様よ」

男の子の声を聞きつけた人々が僕の周りに集まってくる。人間に、動物のような耳と尻尾のある獣人に、人間よりも尖った耳をしたエルフ。様々な種族がいるけど、吸血鬼の国というのは本当のようで、集まった人のほとんどが赤い目をした吸血鬼だった。

吸血鬼の見た目の特徴は、この赤い目と発達した犬歯らしい。たしかにその通りみたいだけど、吸血鬼の僕^{リーデ}の目は青い目をしている。僕は特別なのだろうか？

それにしても、まさかこうも早く見つかるとは……って、そりやそうか。変装も何もしてないんだからバレるのは当たり前だ。

あつという間に数十人の人垣が出来る。

『リ、リーデ』

『変わらないわよ。体動かすの疲れるし』

くっ……。こっちが言う前に言われてしまった。リーデはいつもこうだ。たまに体の主導権を返そうかと尋ねても、決まって「疲れる」やら「面倒」だと言って頑なに断る。結果、この世界にきてからずっとリーデの体は僕が動かしている。

この一週間で気付いたことの一つ。リーデは凄く面倒くさがり屋だった。

「ひめさまー。おからだのぐあいはいかがですか？」

耳の尖った小さな女の子が僕を見上げて話しかけてくる。僕が本を読んでいた期間は、公では風邪を引いたことになっているらしい。周囲を見回すと、僕を取り囲む誰もが心配そうに僕を見つめていた。

……仕方ない。ちょっと頑張つて対応してみよう。

「うん。もう大丈夫。ありがとう心配してくれて」

少し屈んで女の子の頭をそつと撫でる。

「えへへ」

女の子が嬉しそうにはにかむ。それと同時に周囲からも安堵のため息が漏れる。

「ですが姫様。病は治り際が肝心。くれぐれも無理はなさらないでください」

「はい。ご忠告感謝します」

その後も僕に労いの言葉をかけては深々とお辞儀をしてその場を去って行く人達。彼らの様子から、リーデが本当に国民から慕われていることを知る。

こんなにぐーたらなのに、どうしてだろう。

『エルリーデ』

『な、なに？』

『十秒後に目の前の女の子が躓いて転んでしまうわ。助けてあげてなんだ、ぐーたら発言に起こったわけじゃないのか……』って、十秒後？

疑問に思いつつも言われたとおりに目の前にいる女の子にすぐ手を貸せる位置に移動する。

そして十秒後。

本当に女の子は小さな石に躓いて体勢を崩した。すぐに女の子の手を取って引つ張り胸に抱く。

「大丈夫？」

「は、はい。ありがとうひめさま。またたすけてくれてっ」

女の子は顔を真っ赤にして何度も頭を下げてから走っていった。

また、ね……。

『今のは予知能力？』

『ええ。あなたにもそのうち見えるようになるわ』

そんな能力が凡人の僕にも宿るなんて、嬉しいやら恐ろしいやらとにかく、なんとなく彼女がみんなから慕われている理由が分かった気がした。

第1話 えるとリーデ part 4

くう。

露天の立ち並ぶ通りを歩いていたら急にお腹が鳴った。男であればそんなに気にしないのだけど、今の僕はこの国のお姫様。アイドルがトイレになんて行かないというのと同じように、お姫様はお腹なんて鳴らさないのだ。……たぶん。

お腹を両手で押さえながらササツと周囲に目を走らせる。わざとらしく僕から目を背けあさつての方角を見るみなさん。きつと気を遣ってくれているのだろうけど、そうされると返って恥ずかしくなる。

「全てあの屋台のせいだ」

視線を向ける先には、美味しそうなお肉を串に刺して焼いているおじさんが一人。焼き鳥のようにたれを付けて焼いているようで、香ばしい香りが少し離れた僕の所まで漂ってくる。

そういえばこっち来てからお肉食べてないなあ。リーデがベジタリアンだからと毎日毎日緑の葉っぱばかり出されたせいで。

『いやならそう言えば良かったのに』

『嫌じゃないけど、そればかりって言うのがちよつと』

『何の話でしょうか？』

ああそうか。リーデと違って、ティルラには『声が届くように』

と念じながら考えないと、僕の声は届かないんだった。

『偏食はダメだって話』

『分かりました。明日からは料理のバリエーションを増やしましょう』
『う』

『ありが……って、なんでさっきの一言だけで伝わるの？』

『エルリーデ様のことですから』

うーん。納得できたようなできないような……。ともかく、明日からのご飯は期待できそうだ。サラダばかりだったとはいえ、あれ

はあれで美味しかったし。

「ん？」

気がつくと目の前に美味しそうなお肉が。話している間に自然と足が露天に向いていたようだ。

ジュージューといい音が聞こえる。

……じゅるり。

おっと、よだれが出そうになった。

正直お金さえあれば迷わず買っていたところだ。けれど僕の財布はティルラが握っているし、なにより姫がこんな露天の

「おじ様。それを二つ頂けますか？」

今日初めて僕の隣に立ったティルラが財布を取り出して露天のおじさんに声をかけた。

二言三言交わして、硬貨と引き替えに串焼き肉を二本受け取る。

「どうぞ、リーデ様」

手に持つ辺りにハンカチを巻き付けた串焼き肉を差し出す。

ところでふと気付いたけど、ティルラは他人に聞こえる時は僕のことを『リーデ様』と呼んでいた。僕なんて未だに「エルリーデ」

と呼ばれても反応が時々遅れるというのに。まったく器用な人だ。

「いいの？」

目の前の串焼き肉に目を釘付けながらティルラに尋ねる。

「はい。お昼も近かったことですし」

いや、そうじゃなくて、

『姫ともあるうものが串焼き片手に食べ歩きなんて良いの？』

『問題ありません。リーデ様もしていたことですから』

凄い庶民的な姫様だな……。

「じゃあ遠慮なく」

ティルラから串焼き肉を受け取る。すぐにも齧り付きたかったけど我慢して、もう一つ疑問に思ったことを聞いてみる。

『……毒味とかはいいの？』

『毒味、ですか？ はい。必要ありません』

『本当に？』

たしかテレビで見た時代劇では殿様の食事に毒が盛られていないか確認するための毒味役がいたような。

『心配性ね。ティルラが良いと言ってるんだから良いのよ。……まったく。毒くらいで死ねたら苦労しないわよ』

『……それどういう意味？』

『冗談よ。私の体には常に魔力障壁が張ってある。少しでも私に害をなすものであれば弾かれるから安心しなさい』

魔力障壁……たしかそれは『障壁魔法』に分類されるもので、膜のようなものを自身又は自身の周囲に張り巡らせて外敵から身を守るといった比較的难度の低い防御魔法だ。この魔法は使い手によって大きくその性能が左右されるらしいのだけど……。

自分の体を見下ろす。そんなものはどこにも見当たらない。

『探知魔法を使わないと見えないわよ』

ああなるほど。不可視化しているのか。だったらえっと、探知魔法探知魔法……。

本で読んだことを参考にして、魔力障壁を可視化する魔法を想像する。

この世界の魔法には『精霊よ我に力を』云々の詠唱はなく、魔法名を叫ぶ必要もない。むしろ魔法に固有名がない。この魔法に名前がない理由は大きく分けて二つあり、一つが同じ系統の魔法でも使用者によって性質が変わること。もう一つは名前なんてなくても魔法を発動させることができること。この世界の魔法は想像するだけで発動する。その想像することを『詠唱』というらしいけど、人によっては想像しやすいようにと魔法名を独自に考えて決め、詠唱時に叫んだりしているのだとか。

頭の中で奇怪な紋様が浮かび上がる。この紋様は古代文字というもので、魔法詠唱に不可欠なものだけど、なんて書いてあるのかは誰にも分からないらしい。紋様が光を発しながら消えると、体中を何かが駆け巡るような感覚に襲われた。実際この時魔力が体中を駆

け巡っているらしい。その後一瞬視界がぐにやっとゆがんだ後、セピア色のフィルターがかかったかのように、世界の色が変わった。よし、上手く探知魔法が発動したようだ。

その状態で再び体を見下ろす。僕の体は淡い光に包まれていた。これが魔力障壁なのだろう。

ふと手に持った串焼き肉を見る。当たり前だけど光ってはいなかった。

「リーデ様。魔法もいいですが、早くしないと冷えてしまいますよ？」

「へ？」

隣に目を向ける。そこにティルラの姿はなく、僕の斜め後ろのさっきまでいた定位置に戻っていた。

ティルラはもう一本の串焼き肉を頬張っていた。

くう。

声を上げるお腹に急かされて、慌て僕も串焼き肉に齧り付く。久しぶりの肉料理だったこともあり、凄く美味しく感じる。でも少しお肉が大きい。リーデの口が小さいから少しずつしか食べられない。

もぐもぐと口を動かしながらティルラを見ると、彼女も僕のように淡い光で包まれていた。……って探知魔法発動したままだ。切っておこう。

「ティルラも魔力障壁張ってるの？」

「はい。リーデ様のものと比べると稚拙な出来ですが」

「ほえ」

ティルラという時間が長くなる度に、僕の中での彼女のスペックが上方修正されていく。

『世界中どこを探しても、ティルラ以上のお世話係はいないと思うわ』

『いえ、リーデ様の世話係たるもの、これぐらいのことはできないと』

いや、お世話係にそんな高スペックはいらないと思う……。

第1話 えるとリーデ part 5

「んん……」

瞼の向こう側に光を感じて目を覚ました。目を擦りながら怠い体をベッドから引つ剥がす。朦朧とする頭で部屋を見回すと、今日もティルラは背を向けて窓を開けていた。

「やっと起きたのですか？ もうお昼ですよ？」

最初の一言目はいつもこれだ。苦笑するティルラからはあきらめが見て取れる。ただ、その表情は優しげだ。

「ふあ……はふ」

あくびを噛み殺す。

「おはよう。ティルラ」

「おはようございます。エルリーデ様」

モシャモシャと頭を掻く。長い髪が前に垂れてきて視界を邪魔する。

「今何時？」

「十一時を回ったところです」

今日も盛大に寝坊だ。自分のことながら、よくもまあこんな時間まで寝ていられるものだと思う。

「起きようとは思ってるんだけどねえ……」

高校生にもなって（今は中学生くらいだけど）寝坊なんてどうかと思うが、この体が朝にとことん弱い体質らしく、この世界にきてからというもの、僕は一日たりとも一人で起きたことはなかった。吸血鬼だから朝に弱いのか？ と考えたけど、別に吸血鬼云々はまったく関係なく、単純にリーデが朝に弱いらしかった。それを証明するように、リーデは今も眠っている。羨ましい。

毎日ティルラの声で起きるのだから、きつと物音さえ耳に入れば起きられるのだろうだと考えた僕は、先日朝の必需品『目覚まし時計』を用意してもらったティルラに頼んだ。がしかし、この国に

は目覚まし時計というものが存在していなかった。

一人で起きるのは当分無理そうだ。

「ティルラが起こしてくれれば良いのに」

責任転嫁甚だしいことは分かりつつも、つい愚痴ってしまう。

「いつもそうしようとは思うのですが……気持ちよさそうに眠っているのに躊躇ってしまうのです」

何故か目をそらして頬を染めるティルラ。

「ふーん。まさか朝からずっと見てたなんてことはないよね？ い

くら何でもそれはないか。あははは」

「はい、ずっと見てました」

「ははは……は？」

返ってきた言葉に自分の耳を疑う。視線の先ではティルラが恥ずかしそうに俯く。

……これ、ティルラが男だったら危険だったんじゃないの？

ふとそんなことが頭を過ぎった。

「こ、これ着るの？」

下着姿でティルラが持つ洋服を指差す。

「はい。何かご不満でも？」

頭の上に疑問符を浮かべたような顔をして言われてしまった。

ティルラが持つその洋服は、たしか僕の世界ではゴスロリ（これは略称で、正式名称はゴシック・アンド・ロリータだったと思う）と呼ばれるものだった。黒と白を基調とした、フリルやレースをふんだんにあしらった洋服で、胸元と背中はずっくりと開き、スカートは膝上丈と短い。アクセントとして腰には大きなリボンが付いている。

見るには良いけど、まさか僕がこんな派手な服を着ることになるとは……。

「いつものドレスで良いんじゃないの？」

「あれは旅行には向いていません」

いやこれも似たようなものだと思う。

「ご安心を。ちゃんとドレスも数着ほど持って行きますから」

「そういう心配をしてるんじゃないんだけどね……」

まあここで渋っていても仕方ない。下着姿のまま口論するのも精神上よろしくないなので、早々に諦めて着替えることにする。

とはいっても、僕は足を上げたり腕を曲げたりと最低限の動作をするだけで、着替えはティルラに任せっぱなしだ。

ゴスロリ服に身を包むと、次にドレスサーの前に座らせ軽く化粧を施された。少しだけ大人っぽくなった顔に驚く僕を横目に、ティルラは僕の背後に立ち、櫛で髪を梳かし始める。

「今日は気合入ってるね」

鏡越しにティルラに話しかける。

化粧なんてされたのは初めてだった。この前外出したときだって化粧なんてしていなかった。

「当然です。今日は市民の大勢の方がエルリーデ様を見送りに来るのですから」

「はは、まさか。たかだか二、三年旅行に行くだけだよ？ 恨まれ

こそすれ見送りになんてそんな………大勢来るの？」

「はい」

即答される。

そういえばリーデは国民に人気があっただった。

「リーデ様がこの町から出ること自体十数年振りなのです。そのリーデ様を市民の方々が最後に一目見ようとやってくるくらい容易に想像できます」

「な、なるほど……」

まだ出発まで二時間以上あるのに、早くも緊張してきた。僕の予想ではティルラと二人でさっとお城を出て、さっと町を抜け、さっと城壁の外へ出て行くはずだったから。

「髪はどうなさいますか？」

「良く分かんないから、ティルラの好きなように」

そう言って鏡を見つめていると、ティルラは僕の右側の髪を少し取ってまとめ、その根元をリボンで止めた。反対側も同様にしてまとめ、ツーサイドアップにする。

「いかがですか？」

「うん。良いと思うよ」

ちょっと幼い感じがするけど。

「ありがとうございます」

ティルラは嬉しそうに微笑んだ。

それは数日前のリーデの一言が始まりだった。

僕は緑一色じゃない晩ご飯とお風呂を済ませ、あとは寝るだけという状態で、紅茶を飲みつつ本を読んでいた。

「私、一度で良いから旅行してみたかったのよ」

「旅行？ 突然どうしたの？」

鏡に映る自分、リーデに話しかける。別に鏡を見る必要はないのだけど、こっちの方が話しやすい。

「ほら、あなた言ってたでしょ。犬になって旅に出て、自由の身を乐しむって」

犬？ …… ああ、あの暗闇にいたときのことが。たしかにそんなことを言った気がする。

「それがどうかしたの？」

「あれからずっと考えていたのよ。私も旅に出てみたい。でも面倒くさい。どうしようって。そう悩んでいたときに、ふと気づいたの。今ならあなたが私を好きのところへ連れて行ってくれる。旅行に行くなら今しかないって」

いつもより若干語気の強い声が頭に響く。

気づかれてはいけないことに気づかれた気がする。

『そういうことだからティルラ。旅行に行く準備よろしく』

「分かりました。では、さっそく準備に取りかかります」

カップに紅茶を注いでいたティルラが僕に一礼して部屋を出て行った。

……え？　今のあれだけで決まったの？

『前々からティルラには旅行に行きたいと言っていたのよ』

「いやそういうことじゃなくて……一国の主がそう易々と国を留守にして良いの？」

いくらグータラ姫とはいえ、これだけは個人で勝手に決めるわけにはいかないだろう。

『もちろんちゃんと元老院から許可を取った上での話よ。それに姫とはいっても、政治その他諸々全ては昔から元老院に任せてあつて私が関与する必要はない。そして万が一のためにと、元老院には彼らの監視役を数名紛れ込ませているわ。旅行中も常に彼女らと連絡を取り合うようにするから、あなたが思っているような心配は何一つないわ』

そっか……。そこまで考えているのなら、もう僕からは何も言うことはない。

「まあ、元々僕はリーデに助けられた身だから、リーデがそうしたいというなら、それに従うだけだけど」

『そう言う考えは止めてほしいって前に言ったと思うけど……今は私のために、その気持ちをありがたく受け取るわ』

後日、元老院にそのことを話したところ、とくに反対も何もなく、すんなりとオーケーを貰った。

そして本日、僕とリーデ、そしてティルラは、ただ単純に「旅行がしたい」というリーデの望みに従い、宛てのない旅に出ることに

なった。

もう必要なものは船に積み込んだ（船？）というティルラと共に数週間過ごしたお城を出て、驚くほど人の居ない通りを抜け、城壁の門へと向かう。

門が視界に入ると同時に、大勢の人の姿が見えた。そこには元老院のお偉いさんの面々を初め、この数週間で会った人、会ったことのない人、それら多くの人々が僕を見て手を振り、歓声を上げていた。中には涙ぐむ人もいた。

ただの私用で旅行に行くだけだ。特に目的があるわけでもない。それなのに、どうしてこんなにも人が集まり、好意的に僕を送り出してくれるのだろう。

『今はそんなこと考えないの。せつかく見送りに来てくれているのだから、笑顔で応えなさい』

『わ、分かった』

とりあえず疑問を押し込めて、出来る限りの笑顔で彼らに応える。何故か目尻が熱くなってきた。別に僕は悲しくもないし、泣くほど感動しているわけでもない。いや、ある程度は感動しているのだけど、それよりも疑問の方が大きかった。おそらくこの涙はリーデのものだろう。リーデの強い感情は僕を通して表に出る。きっとそれだろう。

城壁の門を抜け、先導するティルラの後を付いていく。少しずつ歓声と町とお城が遠ざかるなか、僕は少し寂しさを覚えた。

第1話 えるとリーデ part 5 (後書き)

第1話 えるとリーデ 完

第2話 魔王と勇者 part 1

ティルラが「船に積み込んだ」と言っていたように、『それはたしかに船だった。』

「……」

「……なにこれ？」

良く水の上でその姿を目にする流線形の『それ』は、海でもなく川でもなく、陸にあった。側面辺りにある四つの車輪で、その大きな胴体を支えられて。

「見ての通りの水陸^{ふね}両用船です」

いや、普通船は陸を走らないから。

『あなたの世界の船は走らないの？』

むしろこっちの世界の船は車輪が付いているのが当たり前で、水陸両用だったりするの？

『まさか。世界中探してもこれ以外にはないんじゃないかしら』

良かった。僕の反応はこっちの世界でも普通のようなのだ。

船に乗り込むと、ティルラがマストに帆を張り始めた。それを手伝おうとしたらたしなめられたので、仕方なく船を見て回ることにする。

広いデッキの一角にはパラソルが差しており、その影にはテーブルとデッキチェアが置いてある。中央付近には船内への入り口であるう扉があり、その屋上には船を操作する輪状の舵がある操舵席がある。よく見ると舵は二つあり、おそらく海用と陸用で使い分けるのだろう。

扉を開けて船内へと入る。数段の短い階段を下りた先にはいくつかの個室が廊下を挟んで両側に並んでいた。手前から空き部屋、書庫、ティルラの部屋、僕とリーデの部屋と並んでいるようで、僕の部屋が他のより明らかに広い。それ以外にはシャワー室、お風呂場、食堂、トイレなどなど、生活する上で必要な設備は一通り揃っている。

た。

ところで、外から見た船の大きさと中の広さがまったく釣り合わない。この船はそんなに大きくはないはずなのに、中の部屋は広々としていて天井も高く窮屈さを感じない。もしかして、これも魔法によるものだろうか。

『空間魔法よ。船内をちよつと弄つて、広くしてるの』

弄つてつて、さらつと驚くことを言わないでくれる？

『あなたの世界には魔法はないのよね。部屋が狭かったときはどうしてたの？』

別の部屋に移り住む。もしくは壁に穴を開ける。

『原始的ね』

そつちが超常過ぎるんだよ。

そんな会話をリーデとしつつデッキに戻ると、既にマストには帆が張り終えられていた。

「リーデ様。いつでも出られます。行き先はどう致しましょう？」

『そうね……レメレヴィルへ。せっかくだし、あの子に挨拶がてら顔でも見せに行きましようか』

レメレヴィル王国。たしか僕達の国、カメリアの西に位置する魔法国家だ。国の規模は小さいけど、そこにしかないという古くから伝わる貴重な蔵書を多く抱え、それらを研究し生み出された『魔術カード』^{ソーサリーカード}は、魔法が詠唱できない人にも手軽に魔法を使用することができると、それまで言われた『魔法は魔術師にしか使えない』を覆した画期的な魔法具だ。その人気の高さのせいで、今では世界中で類似品が作られているけど、レメレヴィル製の魔術札は品質が良いと評判が良く、類似品よりも高額で取引されている。

とまあ、知った風に語ったけど、全部本からの請け売りだったりする。

「分かりました。ではレメレヴィルへ」

『あ、ちよつと待つて。……やっぱりコルディリアに寄ってからレメレヴィルでお願い』

コルデイリアはカメリアの北にある小さな町だ。以前カメリアと大規模な戦争を起こし、以来現在も国交断絶中のリウスヴァラ共和国の属領のため、カメリアの姫であるリーデが近づくには危険な場所だと思うのだけど……何か用事でもあるのだろうか。

「まずコルデイリアへ。その次レメレヴィルですね。分かりました」
ティルラが一礼し、操舵席へと向かう。どうやって操縦するのか興味があったので、ティルラの後に続く。

「どうしました？」

ティルラが不思議そうに僕を見る。

「どうやって船が陸を走るのかなって思ってた」

「普通に帆で風を受けて走るだけです……？」

それは帆を張っていたことからなんとなく分かる。

問題は、

「今ほとんど風は吹いてないのに？」

天気の良い昼下がり。さつきからずっと僕の長い髪を少しも揺らすことのない無風状態が続いている。

「もちろんカードを使います」

そう言いながら取り出したのは、細長い緑色のカード。表面にはきらきらと光る石が散りばめられ、変な紋様が描かれている。

これがさつき言った魔術札^{ソーサリーカード}。実物を見るのは初めてだ。

表面に散りばめられた石は魔力が封入された魔力石と、魔法を詠唱する際に必要な循環石を細かく砕いたもので、描かれた紋様は蔵書に載っていた古代文字をそのまま転記したものだ。カード自体にも変な魔力を感じるから、精霊の宿る樹と言われているミストルテインを使っているようだ。たぶんレメヴィル製の魔術札^{ソーサリーカード}だ。

「このカードで『ガスト』と名付けられた魔法が使用できます。これで風を起こし、船を走らせます」

なるほど。魔法にはそういう使い方もあるのか。

魔法と言えばロールプレイングゲームのような敵を倒すための魔法がまず思い浮かぶので、目から鱗だ。

「そろそろ出発しますので、掴まっています」

「う、うん」

慌ててティルラに抱きつく。振り落とされないよう若干手に力を込める。

「あ、あのエルリー様……」

「ん、なに？」

間近にあるティルラの顔をのぞき込む。

「そんなにくっつかれると動けないのですが……」

ティルラの顔は真っ赤だった。

「え、でもティルラが掴まってるって……あ」

すぐに気がついた僕は、勢いよくティルラから離れて近くの手すりに捕まる。

「ごめんごめん。掴まるってこういうことね。あははは」

間違つて受け止めて取った自分の行動を恥じて、それを誤魔化すように笑う。

「いえ、ありがとうございました」

……なんでお礼？ しかもなんか嬉しそう。

「……こほん。では今度こそ出発します」

咳払いをしてから魔術札を右手に持つ。

バインドリリース

ガスト

『束縛解除。突風』

ソーサリーカード

ソーサリーカード

魔術札を上空に投げる。魔術札は一瞬にして消滅し、代わりに突風が吹き始める。

帆に風を受けた船はゆっくりと動きだし、徐々に速度を上げていく。

「わー、凄い。……って、あれ？ そういえば、どうしてティルラは魔法使えるのに、わざわざカードなんて使ったの？」

「わたしはあまり魔法は得意ではないのです。とくに持続させることに関しては」

「でもこの前魔力障壁を張ってたような」

「あれはわたしだけの力ではありません。魔力障壁専用の魔装具を

使っています」

魔装具とは、魔法を詠唱、発動させるのに必要な道具のことで、概ね杖の形状をしている。先端に大きな循環石が取り付けられてあり、物によっては魔力石も取り付けられている場合もある。

「魔装具なんて持ってないように見えるけど……」

「これです」

ティルラがそう言って見せてくれたのは短剣だった。そうか、こんなに小さいからいつも持ち歩いているのに気付かなかったんだ。

短剣にはめ込まれた循環石は鈍く光っていた。ずっと魔法を発動している証拠だ。

「……ところでさ」

「はい、まだなにか？」

短剣を太ももに巻いたベルトの鞘に戻すティルラ。

「目の前に森が見えるんだけど……このまま真っ直ぐ進むの？」

まったく曲がる様子のない船を見て言う。

「はい。このままなぎ倒して進みます」

「やっぱり……」

船は急には止まらない。目前にさしかかった森を見て、僕は何かに「ごめんなさい」と手を合わせた。

第2話 魔王と勇者 part 2

僕達が乗り込んだ水陸両用船は速度を落とすことなく森の中を突き進んでいる。バキバキと痛々しい音をさせながらひた走る船の名は『ベルフラワー』と言うらしいけど、その可愛らしい名前からはほど遠い雄々しき姿を僕に見せてくれている。

ちなみにこの水陸両用船ベルフラワー自体にも魔力障壁を張っているらしく、これだけ木々をなぎ倒しているにもかかわらず、傷一つ付いていない。

そんな光景にもやっと慣れた晴れた日。カメラリアを出て三日後の話だ。

「けぷっ」

昼下がりの午後。食べ過ぎて重い胃を擦りながらデッキチエアに体を預けていると、ティルラが紅茶セットを持ってやってきた。

ちなみに操舵席を空けている今も水陸両用船ベルフラワーは速度を落とすことなく森を突き進んでいる。実はこの水陸両用船ふね、出発から到着までの全てを遠隔操作できるらしい。だったら出発の最初から遠隔操作すればいいじゃないかと思ったのだけど、そこは気分らしい。

「ありがと。ティルラ」

ティルラから紅茶を受け取り、常人には少しぬるいと感じる温度のレモンティーを啜る。さすがティルラ。僕がこの温度がちょうど良いことを分かってくれている。

所謂猫舌と呼ばれる舌で紅茶を堪能しつつ、ふとティルラに目がいく。

ティルラは僕の隣に立ってじっとこちらを見つめている。お城にいるときは気付かなかったけど、ティルラは暇さえあればこうして

僕を見ていた。その目は凄く優しげで、喻えるなら親が愛する子供を見つめるような暖かさを感じる。

何が彼女をそこまで引きつけるのか、聞いてみたい気もするけど、まだエルリーデとなつて一ヶ月足らずの僕には踏み込んではいけな
い気がした。

……まあ今は気にすることじゃない。それだけティルラが僕を、僕達を慕ってくれているということの証拠なのだろう。……時々身の危険を感じるけど。

「そういえば、ティルラって尻尾あるよね？」
「はい」

隠れていた尻尾がスカートの下からひょこつと出てくる。耳同様、狐のそれによく似た、ふさふさとして触り心地の良さそうな尻尾だ。触れたい衝動を抑えながら、ここ最近気になっていたことを聞いてみることにした。

「町にいた他の獣人は尻尾を外に出していたのに、どうしてティルラはスカートの中にしまつてるの？」

……なぜ外から見えないはずの尻尾の存在を知っているのか。それは察してほしい。一応ヒントを一つ。『お背中をお流し致します』
「有事の際に邪魔だからです」

「ふーん……」
うずうずしながら尻尾を見つめる。

「……触りますか？」
「良いの？」

聞き返すと、少し躊躇する素振りを見せた後、「どうぞ」と言つて尻尾を僕のお腹の辺りに置いた。
おそろおそろ尻尾に触れる。

「……っ」

一瞬ぴくつと反応した尻尾は見た目通りふさふさとしていて柔らかく、傍にずっと置いて触り続けていたくなるような、そんな気分にさせる。

『ふああ……おはよう』

頭の中から今日初めてのリーデの声が聞こえる。

「おはよう」「おはようございます。リーデ様……っ」

挨拶を返しながら尻尾をさわさわする。これはやめられない止まらない……。

『ってエルリーデ、何してるの?』

「何ってティルラの尻尾触ってるだけだけど? 今日初めて触ってみただけど、これが凄くふさふさしてて触り心地良くて……」

「ああ、なるほど……」

納得した様子のリーデ。きっとリーデも触ったことがあるのだろう。

『でもほどほどにしておきなさいよ。尻尾って結構敏感らしいから』
「敏感?」

『ティルラを見てみなさい』
言われてティルラを見上げる。

「……っ」

ティルラは何かに耐えるようにぎゅっと手を握り、眉間に皺を寄せていた。頬は赤いし、息もあがっている。心なしか目も潤んでいるような……。

これはまさか……

「風邪っ!?!」

『この鈍感っ!』

リーデの大声が頭の中に響く。きーんと耳鳴りがして頭を押さえる。

「と、突然大声出さないでよ……」

『ったく。良い? 獣人にとって尻尾は性感帯なの。感じやすいの。そんなところをずっと触られてごらんなさい。どうなるかは鈍感なエルリーデでも分かるわよね?』

「せ、せいかなっ!?!」

ティルラと目が合う。その目は何かを訴えるように僕を見つめて

いる。途端に背筋に寒気が走り、さっと目をそらす。

「え、えーと……ごめんなさい」

頬に手を当てると熱かった。

「い、いえ。お気になさらず」

『ティルラ、落ち着きなさい。今のエルリーデに何かすれば、自身をコントロールできずに魔力が暴走して、この辺り一帯に被害を与えることになるわ』

「はい。申し訳ありませんでした」

少ししゅんとなったティルラが頭を下げる。元はと言えばティルラは親切心でやってくれたことだ。まだ少し頬の赤いティルラを見て、申し訳なく思う。

『そう思うのなら、ティルラの相手してあげる？』

僕にだけ聞こえる声でリーデが言う。

いえ、遠慮しておきます……。

第2話 魔王と勇者 part 3

朝。とは言っても昼前だけど、開口一番にリーデは僕に

『今日は魔法の実習をするわよ』

と言ってきた。

それまでも何度が魔法を使ったことはあるけど、それらは探知魔法のような簡単な魔法ばかりだった。さすがにそれだけではだめだということ、有事の際にも使える戦闘用の魔法を練習しておこうということになった。

ということで、今僕はリーデに実習を少し待ってもらって、お城でも一度読んだ魔法の教書をもう一度読み返していた。

教書とは言っても誰かの手書きのノートのそれは箇条書きで魔法に関することを順序など関係なしに書き連ねたものだ。

内容を纏めると次のようになる。

魔法はこの世界で古くからあるもので、起源は定かではない。歴史として残ってる時代には既に人は魔法を使っていたらしく、そんな古くからあるもののな、その詳しい原理は未だ良く分かっていない。

魔法を使うにはいくつか手順が必要となる。

まず唱えたい魔法を出来るだけ具体的に想像する。イメージ想像すること

によって、頭の中に『文字』が浮かび上がる。この時文字が浮かび上がる人が魔法を使うことができ、それらの人々を総称して『魔術師』と呼ぶ（浮かび上がる文字種が多いほど扱える魔法も多い）。

魔術師は浮かび上がった文字、『古代文字』を自身の魔力もしくは魔力石の魔力によって、循環石を装着した魔装具を介して古代文字を描く。これにより『アストラル界』とこの世界を一時的に繋ぎ、アストラル界に存在するという精霊（地域によっては神と呼ばれる）の力を魔力と引き替えにしてこの世界に召喚、魔法が発動となる。

魔法には様々な種類があるが、明確な定義はされていない。これ

は魔術師によって魔法は大きくその形や特性を変えるためであり、そのため『空間魔法』や『探知魔法』などのように大分類するに留めてある。ただ、これだけでは魔法を説明しきれないため、『低出力型局地魔法』などと、その魔法の出力（消費魔力）、効果範囲等を示す方法や、魔法の難度によってS A B C Dの大きく分けて五段階で示す方法もある。

使えば何かと便利な魔法だけど、やっぱり危険な部分もある。特に危険なのが、魔法はいくら使っても疲れを感じないということ。魔法を使う際に消費する魔力（魔力石からの魔力を除く）は魂から捻出しているものらしく、魔力がゼロになることは魂がなくなるということ、つまり死ぬことになる。さすがに魂の方もそれは避けたいらしく、危険領域まで魔力を消費した際には体に息切れを起こし、循環石にも何かしら変化を起こして、これ以上魔力を消費しないよう訴えてくるらしい。

このようにして、魔術師は魔装具を用いて魔法を使用することから、一般的に魔術師は魔装具の有無で判別ができる。ただし一部例外もあり、僕のように魔装具を必要とせず、魔法の発動直前まで全てを自身の体内で済ませてしまう魔術師もいる。これらの魔術師は総じて扱える魔法が多く、魔力値も高いので、魔術師と区別するため『魔導師』と呼ばれている。

まあそんなわけで……魔導師であるリーデ、つまり僕は、結構デキる魔術師らしかった。

まったくそんな実感はないけど。だって比べる相手がティルくらいしかないし。

『次、右斜め前の赤い木。風』

手のひらをリーデが指示した赤い葉を付けた木に向け魔法を詠唱をする。体がぼうつと淡く光り、手のひらの先に激しく渦巻状に吹

く風が発生する。それを赤い木に狙いをつけて放つ。

「あ、間違えた」

予想以上に大きくなりすぎた風の玉は、ひと一人すっぽりと包まれる位の大きさになって飛んでいき、進路上の木々を削り取り、目標の赤い木の上部を粉々に切り刻んだ。

「うーん。失敗だ」

予定では手のひら大の風の玉を目標に当てるつもりだったのに、見当違いな大きさになってしまった。

「三十発全て命中。上出来かと思えます」

「ええ。十分すぎる出来だわ」

ティルラとリーデが手放しで僕のことを褒め称える。

「そ、そうかな。でも、そのうち十発くらいが予想よりも大きな魔法を詠唱しちゃったし」

「私が不器用だからそこは仕方ないわ。むしろ二十も想像した通りの出力の魔法が詠唱できたことの方が驚きよ。ほら、左後ろの黄色い木。雷」

すぐに空に向けて右手を上げる。体が淡く光り、直後に黄色い木に雷が落ちる。

今度は想像通りの魔法を詠唱できたことにほっとする。

「実習を始めた初日からこれとは……。人は何かしらの特技を持っているものだけど、あなたの場合それが魔法なのかしら」

「魔法というよりは、その正確さ、集中力だと思われます」

「集中力ねえ……。たしかに私にはなかったものだわ。はい、正面の大きな岩、破壊して」

よし、と身構えてすぐ今までと違う指示に首を傾げる。

「破壊って、属性は？」

「何でも良いわ。通行の邪魔だから早くどかして」

何でも良いと言われても何が良いだろう。岩を破壊するなら……ダイナマイト？ ってことは爆裂する魔法。属性は火？ とにかくやってみよう。

化学の実験の際に見た、水素爆発をイメージする。

手の平を正面に向ける。体が淡く光り、次の瞬間

「お見事です」

大きな岩の頂上で発動した魔法は、地響きを伴うほどの爆発を起こしてクレーターを形成した。もちろんそこに岩の姿などない。

『威力も申し分なし。これならもしものことがあっても大丈夫そうですね』

「もしもなんて物騒なこと言わないでよ」

いくらかお墨付きをもらおうと、僕は魔法に関しては初心者なんだから。

『何言ってるの。これから行くコルディリアは、辺境とは言えあのリウスヴァラに属する町。何があってもおかしくないわ。ティルラ、あれをエルリーデに渡して』

リーデがそう言っていると、ティルラはその手に持っていた一冊のノートを僕に差し出す。

「これは？」

『私が使う魔法を書き溜めたものよ。今あなたが詠唱して見せた低出力型局地魔法を初めとした様々な用途の魔法を書き記してあるわ。たぶんそのほとんどが今のエルリーデには扱えない、又は扱ってはいけない魔法ばかりだろうけど、念のために一通り目を通しておいで貰いたくて』

リーデの話を聞きつつ、ぱらぱらとページを捲っていく。見たところ一ページにつき一つの魔法が書かれてあるようだ。一行目にその魔法の名前らしきものがあり、その後にそれがどういった魔法なのか詳しく書かれている。

ちなみに一ページ目に書かれていた魔法は『アマテラス』と言う高出力型広範囲殲滅魔法、クラスはSS。^{ダブルエス}これがどういうものか分かりやすく言っていると『これ一つで町一つ、国一つ消し去ることも可能』というもの凄く危険な魔法だ。

『もちろん高難度の魔法はまだ使ってはだめよ。まあ、当分の間は

初歩的な魔法以外使えないようこちらから制限かけるけど』

「っ、使わないよこんなの!」

ノートを勢いよく閉じる。一通り見た感じでは、その半数近くが戦闘用の魔法であり、またその半数ほどは前述したアマテラス級の魔法だった。

『使う使わない使わさないはともかくとして、魔法名だけで詠唱できるよう一通り全て覚えなさい。エルリーデが今よりも魔法に慣れて、必要に迫られたときのために』

「僕はそうならないことを願うよ」

渋々僕はもう一度そのノートを開いた。

第2話 魔王と勇者 part 4

コルディリアの近くまでやって来た僕達は、人の目を引く水陸両用船ラフを森の中に隠し、馬車で町まで行くことにした。馬なんて船のどこで飼っていたのかと突っ込みを入れたかったが、どうせまた空間魔法とやらで船底辺りに馬車を置けるほどのスペースを作っていたのだろう。

「船に誰も残らなくて良いの？」

馬車の後部座席に座り、馬車を操作するティルラに話しかける。

「はい。船に近寄れないよう、周囲に感覚を狂わせる精神魔法を展開しています。また、保険として結界型の起爆魔法も仕掛けていますので、万一にも見つけられることはないでしょう」

「船よりも別の心配ができたよ……」

戻ってきたら誰か転がってました、なんてことがないことを祈ろう。転がってたら、それはそれで祈ろう。恨んで幽霊になってでてきませんように、と。

「ああそうそう、エルリーデ。他人に私の存在を悟られないようよろしく。面倒事は嫌だから」

「うん。分かってるよ」

僕としても、独り言をぶつぶつと呟いて引かれるのは避けたい。今まではティルラと二人だけだったから気にしてこなかったけど、これからは多くの他人と出会うことになる。リーデと話すときは言葉には出さないよう注意しよう。

「それとリウスヴァラでは、私達が吸血鬼だつてことは伏せること。あの国、吸血鬼嫌いらしいから」

「敵国の僕達カメリアが吸血鬼の国だからね……。ところでリーデ。僕がカ

メリアの女王」

「姫」

「こだわるなあ……」。

『……姫だつてばれないように、変装とかしなくていいの?』

いつものゴスロリ服(リーデの好みらしい)を見下ろして言う。

『私の姿を見たことある人なんて、国内を除けばほばいないから大丈夫よ。たとえいたとしてもそれは二十年前の戦場で遠目に私を見た程度だろうし』

そういえばリーデはこの十数年、町から一步も外に出ていないんだっけ。まさか引きこもっていたことがこんなところで役に立っているて。

『なにより、今のエルリーデの瞳の色は青色。吸血鬼の特徴でもある赤目ではないから、口の中さえまじまじと見られない限りは吸血鬼だとばれる心配もない。あなたから私に繋がることはまずないわ』

『な、なるほど……』

それでも「もしも」と考えてしまう僕は微妙な返事をする。

『なにその返事は。あなた前向き思考なんじゃなかったの?』

『それはあくまで僕自身のことで、他人事になると慎重になるのっ』

『普通逆でしょ?』

普通ってなんだろうね。っと、そんな哲学チックなことは置いて、

『僕のせいで誰かが困るのが嫌なだけだよ。夢見が悪いつていうか』

僕の言葉にリーデは「ふーん」と呟いて、

『まあでも、下手に変装すると余計怪しまれたりするから、そんな片意地張らずにいつも通りにしていればいいのよ』

『この前、コルディリアはリウスヴアラに属する町だから何があってもおかしくない、って言ってたじゃないか。そんな気楽なこと言っつてて良いの?』

『あれは別にバレたら云々ってことじゃなくて、戦争を仕掛けてきたあのリウスヴアラの国民だから、ちよつと肩があたったくらいで喧嘩をふっかけてくるような、血の気の多い人間がいてもおかしくない、そう言ったのよ』

『凄い偏見が混ざっているような……』

『戦争を仕掛けてきた国にはこれくらいでちょうど良いのよ』

若干口調を強めて言ったリーデからは、リウスヴァラへの嫌悪感が感じられた。それもそうか。戦争を仕掛けてきた相手に好意的でいられるはずがない。……戦争なんて体験したことないから想像のみだけ。

『……そうね。そんなに気になるんだったら、こうしましょうか。

あなたは人間のエルリーデ・ケルクス。西の国、ルノンクール王国出身のとある伯爵家の娘。家の掟に従い、見聞を広めるため、侍女を連れて世界を旅している』

……？

『なにそれ？』

『あなたの設定。こうやって決めて、それに成りきれば少しは気分も楽でしょ？』

『そうかなあ……』

設定は設定だ。何かが変わったわけじゃない。

……でも、たしかに少しだけ気が楽になった気がしないでもない。あ、やっぱり気のせいかも。

『もうどっちでもいいわよ。とにかく、せっかく考えたんだから、今からあなたはその設定でいくこと。いいわね？』

さっそくリーデが面倒になって押しつけてくる。

『はいはい。えーと、人間でルノンクール出身の伯爵の娘、ね』
忘れないように口に出して覚える。

「エルリーデ様。町が見えてきました」

視線を前に向ける。木々の合間から町らしきものが見える。カメラリアのような高い城壁ではなく、僕の背丈くらいの低い塀に囲まれたその町は、町と言うよりも村、集落と言った方がしっくり来るような、本当に小さな町だった。

『エルリーデ。馬車を降りるときに、杖の魔装具を持って行くのを忘れないようにね』

『杖の魔装具って……これ？』

座席に転がっている杖を手取る。それは僕の腕の長さくらいの短い杖で、先端に大きな循環石がついている。

でもリーデは魔導師だ。魔装具なんて必要ないはずだけど……。『手ぶらだと私達^{エルリーデ}が何者か分からないでしょ？ 魔装具を持っていれば、周囲は私達^{エルリーデ}を魔術師として見てくれる。そして魔術師だから変な輩に絡まれることも少なくなる』

なるほど。そういうことか。それなら必要だ。

循環石は本物のようだけど、杖自体は驚くほど軽かった。おそらくは持ち運びしやすいように、戦闘使用は考えずに出来るだけ軽い素材で作っているのだろう。

『それで、町に行ったらどうするの？』

なんとなく聞きそびれていた、ここへ着た理由を尋ねる。

『町に用はないわ。……ああ。強いて言うなら情報収集かしら。リウスヴァラとは国交断絶して以来、情報なんて皆無だし。行きたいのはその先の平原よ』

平原？ そこに何かあるのだろうか。

『行ってみてのお楽しみよ。とりあえず町にいきましょ』

第2話 魔王と勇者 part 5

「なんか騒々しいね」

『そうね。どうしたのかしら?』

僕の言葉にリーダーが同意する。

おじいさんが軒先で日向ぼっこしているような、のびか長閑な風景を想像していたのに、軒先におじいさんの姿はなく、町の中はざわついていた。

「ドラゴンでもやってきたのでしょうか」

少し後ろを歩くティルラが言う。

「ドラゴンって、尻尾があつて鋭い牙があつて、火を噴くあのドラゴン?」

「火を噴くかどうかは個体によりますが、おそらく想像しているものでば間違いないかと」

「ほえ。本当にいるんだ」

僕のいた世界では空想上の生き物だったドラゴンが、こっちの世界では実在しているらしい。

ファンタジーっぽくて、ちょっとテンション上がってきたかも。

『期待してるところ悪いけど、ここにはいないわよ』

『そうなの?』

『ドラゴンの生息域は限られていて、この周辺にそれはないはずよ。ここから一番近い所でも水陸両用船で一週間はかかるんじゃないかしら。ドラゴンはあまり巣から離れることはないから、ここに来ることはまずないわね』

なんだ。一目見たかったのに。

せつかく上がったテンションが急速に冷めていく。

『ドラゴンは気性が荒いから、運が悪ければ目があっただけで襲いかかってくるわよ?』

目が合っただけって……不良よりもたちが悪い。

『まあ今のあなたではドラゴンを相手するには荷が重いし、当分は出会うことがないよう祈ってなさい』

そうすることにします。

「で、ティルラ。まずはどこへ行けば良いの？」

「情報収集ですから、ギルドでしょうか」

「またもファンタジーチックな言葉が出てくる。とはいえ、ギルドという言葉自体は実際に中世ヨーロッパ時代にあったとか世界史の授業で習った……ような気がする。たぶんそのギルドとは意味が違うと思うけど。」

『ギルドとは、簡単なものなら家の草むしり、難しいものならドラゴン退治、他には国家からの志願兵の募集などなど、日々様々なところから依頼される仕事を纏めあげ、それらを欲する人々に受注して利益を得る、仲介屋のことよ』

「仲介屋、なるほど。ロールプレイングゲームによくあるクエスト屋みたいなところか。」

『ギルドに出入りするものは、仕事を求めて町を転々とする冒険者やら傭兵だから、情報を集めるならもってこいの場所ね』

「冒険者、傭兵……。自然と、鎧を身に纏った屈強な男達がガハハと笑いながらビールを飲み交わす姿が思い浮かぶ。」

「凄まじく暑苦しい光景だ。そんな場所に僕が行っても大丈夫なのだろうか。とりあえず、こんな子（中学生）がギルドに行けば、浮いた存在になるのは間違いない。」

『なにを想像してるのよ。そんなマッチョばかりなはずがないじゃない。今は、危険を冒してまで敵に近づかないと何も出来ない剣士よりも、安全に遠くから敵を狙い撃てる魔術師が重宝される時代。剣士なんて時代遅れ、とまでは言わないけど、剣士が大手を振って歩けるような時代は三、四十年前に終わっているわ』

『とはいえ、一般的な魔術師は剣士と比べて身体能力が著しく低く、また、魔法を詠唱、発動する際にできる大きな隙は格好の的となります。そのため、基本的に魔術師は自身を守護する剣士と組むこと』

が望ましく、今でも剣士の存在は必要だと言われています。ですから、おそらく今から向かうギルドにも、エルリーデ様が想像したような剣士と、そうではない魔術師とが半々に存在するのではないのでしょうか」

ロールプレイングゲームだと、基本構成は剣士二人に魔術師一人と剣士の割合が多く、パーティーの要も剣士。主役も剣士なことが多いので、この世界でも人気があるのは剣士だと思っていたけど……そうじゃないようだ。

「ともかく行ってみましょう。どうやらこの町の騒ぎの原因もギルドにあるようです」

そう言っただけで彼女が見つめた先には、人だかりに囲まれたとある建物。西洋風の盾と剣が描かれたエンブレムが日の光に当たって輝くギルドだった。

『人が多すぎて入れないじゃない』

「高名な方でも来ているのでしょうか」

ギルドの入り口は、中をのぞき込む人々で埋まっていた。
「困ったなあ……これじゃ中の様子も見えない」

「……お任せ下さい」

……何を？ 疑問に思っただけで振り返ると、ティルラの右手が自らのふとももへと伸びていた。

「たしかそこにあつたのはたしか……短剣だっ！」

「ティ、ティルラ。それはなしっ」

ティルラの体がびくつと震えて動きを止める。

「ですがエルリーデ様。これがつとりばや」

「刃物はだめだっ」

「……分かりました」

渋々といった様子で手を戻すティルラ。なんで突然短剣なんて

のを使おうとしたのだろう。

『あなたが『困った』なんて言うからよ』

『そ、それだけで？』

『ええ』

……よく分からないけど、次からはティルラの前で「困った」なんて言わないようにしよう。

「ではこのまま失礼します」

「へ？　ち、ちよつと」

僕の制止を聞かず、ティルラはギルドの入り口まで進むと、人との間に手を差し入れ、力任せに大きく横に開いた。

「いたっ！　ちよつとあんた、なにす」

「邪魔です。どいてもらえませんか？」

押し退けられた女性がティルラに文句を言いかけるも、口調はいつも通り。けれどお腹に響くような低音と鋭いまなざしを向けられて言葉を失う。同様にティルラが反対側にいた男性にも視線を送ると、男性はすぐごと引き下がっていった。

そしてあつという間にギルドへと続く道が出来上がった。

「さあ、エルリーデ様、いきましよう」

行きましようって、こんなに注目されてる中を？

ティルラのせいで今僕は何十人という人々の視線を浴びている。

こんな中を歩けって言うの？　たしか僕が誰かばれないよう、目立たないようにしないといけないんじゃないかなかったっけ……？

『そうよ。出来るだけ目立たないようにするべきね』

『じゃあこれは？』

『それはあなたが『困った』なんて言うからよ』
やっぱりよく分からないけど僕が悪いらしい。

『結局僕のせいかつ』

手に持った杖をぶんぶんと上下に振って八つ当たりする。循環石が取れるんじゃないかとちよつと心配したけど、造りはしっかりしているようで、ぴくりともしなかった。

視線を上げてティルラを見る。僕が来るのを待っているようだ。

……はいはい。行きますよっ。行けば良いんでしょっ。

一度深呼吸をしてから、ティルラが作った道を多くの人の視線を浴びながら歩いて行く。あまりの恥ずかしさに顔が熱くなるのを感じる。そういえばカメラリアを出るときもこれ以上の人の視線を浴びてたっけ。でもあれは僕に好意的なものだったから自然に受け止められたわけで、今は「誰こいつ？」って声が聞こえてきそうなどちらかという好意よりも敵意が強いものだ。

いやまあ実際敵なわけだけど。向こうは気づいてないだけで。

そんなことを考えつつティルラの横を通り、ギルドへと入っていく。はふうと息を吐いて、いつの間にか下がっていた視線を上げる。そこには僕が想像していた通りの重そうな鎧を身に纏った屈強な剣士と、ティルラが言っていたように軽装で魔装具を持った魔術師がいた。

おー。ゲームの中にいるみたいだ。

みんなの邪魔にならないよう隅の方の席に座り、中をぐるっと見回す。彼らは部屋の中央に置かれた掲示板を熱心に眺めていた。その掲示板にはびっしりと紙が貼られていて、しばらく様子を窺っていると、ふいに掲示板を眺めていた剣士の男が掲示板の紙を一枚引っ剥がし、カウンターに立つ女性へと持って行った。紙を受け取った女性は別の紙を男に渡し、それを受け取った男は魔術師の男を連れてギルドを出て行った。

きつとあの掲示板に依頼内容の書かれた紙が貼られていて、それをカウンターに持って行くと受注することができる。そういうシステムなのだろう。

『さあ、誰でも良いから話しかけて、この国の情報を得るのよ』

『誰でも良いって、この怖そうな人達に聞けって言うの？』

『怖そう？ どこが？』

『ほら、あのするどい目つきとか、頬の傷とか』

何人かをこっそり指差す。

『目が悪いだけじゃないの？ 頬の傷なんて、ソイツが弱いつていう証拠じゃない』

たしかに見方を変えればそうかもしれない。目つきの鋭い人は掲示板を穴が開くんじやないかというくらい見つめ、時より目を細ているし、頬に傷のある人も、そういう風に見れば途端に弱そうに思えた。

『どれも見た目だけよ。安心しなさい』

『う、うん。でもなあ……』

ぶっちゃけますと、初対面の人と話すなんて事は得意じゃないんです。どちらかというと不得意なんです。なぜなら僕は人見知りだから。

『あの、わたしがお聞きしてきましようか？』

『ほ、ほんと！？』

僕はティルラの手を取って目を輝かせる。「はい」と優しく微笑みを返すティルラが天使に見える。

『だめよ。甘やかしちゃ。人見知りなんだったらなおさらエルリ―デが行きなきゃ』

スパルタだ。ここにスパルタがいるっ。

「でしたら……あつ。エルリ―デ様、どなたかがこちらに近づいてきています」

「へ？ どこ？」

ティルラが右の方を指差す。それを目で追うと、たしかにこちらを向いて歩いてくる人がいることに気付く。

まさかその人が、のちに僕の弟子になるなんて、この時は思いもなかった。

「こんにちは。見かけない顔だけど、どこからきたんだい？」

そう言っ僕に微笑む彼を見て僕は、

……軽っ。

それが彼の第一印象。見た目も軽装で軽いけど、それ以上に言葉が軽い。あと、歯並びが異常に綺麗。ついでに歯も綺麗。二カッとしたらキラリと光りそうだ。きもい。

「おっと。そんなに警戒しないでくれ。君が困っているようだったから話しかけただけなんだ。違うのであれば許してくれ。すぐに引っ込むから」

ほお……。この見るからに女受けしそうな清純派金髪俳優からそんな謙虚な言葉が聞けるとは思わなかった。まあその言葉がどこまで本音かは分からないけど。あときもい。

「酷い言いようね」

リーデが苦笑しながら言う。

「見た瞬間何故かいらつとしたんだよね。たぶん生理的に受けつけないタイプなんだと思う」

「もしかして元男としての妬み？ 彼、結構格好いいものね」

「ね、妬みなんてしてないよっ！」

たしかに彼は僕よりも背が高く格好良くて、正直うらやましいやいやなんでもないなんでもない。

「とにかく、妬んでなんかないからね！」

「ふーん」

これは全然信用していない声だ。

「まあそんなことはどうでもいいわ。それよりも、せっかく彼から来てくれたのだから、彼と話して情報収集しなさい」

「な、なんでこんな奴から」

「やっぱり妬んでるんじゃないの？」

「……わ、分かった」

渋々彼に向き直る。彼は笑顔を絶やさず僕の言葉を待っている。

な、何を聞こう。とりあえず、彼のことを聞いておくのが無難……なのかな？

一度小さくコホンと咳払いをしてから、僕は口を開いた。

「えーと……。ご、ご職業はなにを？」

見合いかっ！

自分自身にツツコミを入れるも時既に遅く、言ってしまったものは仕方ないので、開き直って彼の言葉を待つ。

何故か彼は恥ずかしげに頬を少し赤くすると、「笑わないでくれよ」と前置きをしてこう言った。

「俺、今は勇者をしてるんだ」

……はい？

僕の目は点になった。

第2話 魔王と勇者 part 6

勇者とは、いさましい人、勇気のある人、勇士。あとゲームの主人公的な人。おそらく彼が言った『勇者』とは、後者の主人公的な意味だと思う。この意味での勇者とすると、大抵は平和だった日常からひよんな事件に巻き込まれて旅に出て、剣を片手に次から次へと現れる強敵を倒して進み、ある時ふと自分には特別な力が備わっていたことに気づいたりして、最終的には何故か彼を慕って集まった仲間と共に魔王を倒して世界を救っちゃったりして「キヤーカーコイイ」と世間から黄色い声やら賞賛の声があがるなか、本人は「平和な日常に戻りたい」とカッコイイ台詞を残しつつ、ちゃっかりヒロインといい関係になってハッピーエンドを迎える勝ち組の人のことだ。最近じゃダークヒーロー的なキャラクターが主人公だったりといろいろあるけど、王道はやっぱこんな感じだと思う。

……で、この人はその『勇者』なのと言う。女の子のような金髪サラサラヘアに、理想的とも言える整った顔立ち、目は綺麗に澄んだ青色をしていて、僕に向けられた表情は見た者を幸せにさせるような優しい微笑みを浮かべている。美少年と言ってしまつて差し支えないその人は、たしかに『勇者』っぽい雰囲気を持っている。優^{やさ}男的な意味で。

……考えてたらいらいらしてきた。

というより、そもそも職業が勇者つてなに？ 家に引きこもっていたところを両親に無理矢理家を追い出された結果、苦心の末に考えた彼オリジナルの職種とか？ いやいやこんな好青年そうな人が人生プラン何もないニートなわけがないし……まさか本当に勇者？でもこの世界にゲームに登場するような魔王はいない（はず）。一体『勇者』とは何をするのだろう。

『勇者つてなに？』

分からないのでリーデとティルラに聞いてみることにする。

『さあ、聞いたことないわ』

リーデは知らないらしい。

『そう言えばリウスヴアラに数年住んでいたという方から聞いたことがあります。リウスヴアラには『勇者制度』なるものが存在する』

勇者制度？ なにその素敵な制度。国家公認の勇者になって世界を救えつてこと？

『変な制度ね。リウスヴアラのお偉いさん方の頭はお花畑なのかしら』

『わたしもこれ以上のことは聞いていませんので、詳しくは実際本人に聞いてみるのが一番かと』

『だ、そうよ』

はいはい。僕が彼に話を聞けつてことね。

彼から見たら僕達が会話している様は、僕とティルラが目で会話しているようにしか見えなかったはずなのに、律儀に僕達のことを待っていた。笑顔のままで。

「えっと……」

「なんだい？」

……あーなんかいらつとした。「なんだい？」って、なんでそんなに上から目線なんだ。

『だって彼からは私達って年下に見えるでしょ？』

そういえばそうでした。今の僕は150センチにも満たない小さな女の子でした。

僕だって明らかに自分より年下の子に敬語で話すようなことはない。そう考えれば、彼の態度はいたって普通なのかもしれない。

「その、僕、さっきルノクールから来たばかりで、勇者ってどんな職業なのか分からないんだよね。良かったら教えてくれないかな？」

何故か彼に対しては初めから砕けた喋り方をしていることに気づく。やっぱり僕は心の何処かで彼を妬み、自然とそれが態度として

出ているのかな……？　ないないそれはない。

「ルノンクールって、そんな遠いところから来たのかい？」

「う、うん。家のしきたりで、見聞を広めるためにいろんな国を回ってるところ」

実際はただの旅行だけど。しかも出発地は隣のカメリア。

「へへ。偉いな。俺なんて生まれてから一度もこの国を出たことないよ。そうか、ルノンクールか……それじゃあこの国のことなんて分からなくて当然か」

うんうんと頷く彼は大きな剣を背負っていた。ゆうに僕の身長を超える長さのそれは、すらっとした刀身の形状から察するにクレイモアと呼ばれる両手武器だ。細身な体躯をした彼には、勇者ということも相まって、レイピアみたいな細い片手剣が似合うと思っただけに、背中のクレイモアは少し合っていないように見えた。

「よし。君は見聞を広めるために、とも言ったし、だったら何故勇者が誕生したのか、リウスヴァラの歴史も交えて説明することしよう」

「うわぁ……ありがとう」

ありがた迷惑だ。なんで彼から歴史を教わらないといけないんだ。つと。そういえば自己紹介がまだだったな。俺は人間のアリアスⅡアーレンス。生まれも育ちもリウスヴァラのしがたない剣士だ」

ニカツと歯を見せて笑い、手を差し出してくる。思っていたとおり、歯がキラリと光った。まるで芸能人だ。マニキュアでも塗ってるんじゃないだろうか。

「僕はエルリーデⅡケルクス。ルノンクール出身の人間。一応魔術師」

簡潔に伝えて手を握る。

うわっ、でかつ。

アリアスの手が大きすぎて、手を握るというよりは掴まれてしまった。

「その若さでギルドに出入りするくらいの魔術師とは、凄いな」

その若さって、一体僕を何歳だと思っっているのだろう。ってりー
デって何歳？

『さあ。八十くらいまでは数えてたんだけどね』
まさかのおばあちゃん！？

『……エルリーデ。それ以上言つと頭痛でのたうち回ることになる
けど良いの？』

すみません言い過ぎましたお姉さん。

『お姉さん、ね。いいわねその呼び方。今度から私のことそう呼び
なさいよ』

そ、それはちょっと恥ずかしいので遠慮したいです。

……あれ、そうなる^{エルリーデ}と僕は何歳になるんだろう？

『0歳で良いんじゃない？』

まったく良くない。0歳やら八十歳なんて言つたら種族が疑われ
る。

「俺はこの前十八になったばかりなんだが」

やば、この流れは……。

「なあ、エルリーデってなんさ」

「お、女の子に歳を聞くのは失礼だと思うよ？」

……何を言ってるんだ僕は？

咄嗟に出た言葉はそれだった。いやもう昔の自分に戻れないのは
分かってるし、これからはエルリーデという女の子として生きてい
く覚悟は出来ているのだけど、そうすぐに女の子らしく振る舞うこ
とには抵抗があり……つまりは恥ずかしい。

そんなわけで顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった僕をアリ
アスは、

「そうだな。悪かった。歳を聞くななんて失礼だった」

と、僕が怒ってしまったと勘違いをしたらしく、深々と頭を下げ
た。

「……分かってくれたなら良いよ」

本当のことをいうとややこしくなりそうだから、そのままにして

おくことにする。ああ、胸の辺りが痛い……。

「そうか。エルリーデは優しいな」

いいえ、優しいのはあなたです。

元々嘘が苦手な僕は、良心の呵責に苦しむ。

こうなるんだったら適当に十四歳とでも言えば良かった。ってそれも嘘か。どっちもしてもだめだった。

「さて、それじゃあお互いの自己紹介も済んだところで、本題に入るとうかが」

「よ、よろしくお願いします」

教えて貰う立場上、椅子に座っていた僕は、膝に手をそろえてぺこっと頭を下げた。

第2話 魔王と勇者 part 7

カメリアの北に位置するリウスヴァラ共和国は、三百年前に建国した比較的歴史の浅い、製造業が盛んな国家だ。共和制を敷いており、現国王は前国王の息子のヴィートスⅡローエンシュタイン。彼はカメリアとの戦争を引き起こした革新派の父とは違って保守派に属していたため、当時戦争中に死亡した父に代わりに国王の座に就くと、即座に兵を引き上げ、戦争を終結させた。

終結させた主な理由は二つ。一つはすでに劣勢だった戦争をこのまま続けてもじり貧だと悟ったこと。そしてもう一つは、戦争により深刻な財政難に陥ったこと。

世界でも屈指の軍隊を保有していたリウスヴァラだったが、その巨大すぎる軍隊は国の財政を圧迫していた。結果、戦争によって財政難はさらに加速し、国民の生活にまで大きく影響を及ぼす事態となった。これにより国民からは現政権を批判する声が高まり、同時期の前国王の死去も相まって、リウスヴァラはカメリアとの戦争の早期終結を余儀なくされた。だが、それでも国民の半数近くと革新派は、カメリアが保有する膨大な地下資源を欲していた。そのため国家としてカメリアに白旗を掲げるわけにはいかなかった。

カメリアへの侵攻は続ける。しかし深刻な財政難のため勝算のない戦いに軍隊は動かせない。

そこで制定されたのが『勇者制度』という法だ。勇者制度とは、四年に一度、国王に選ばれた剣士又は魔術師を勇者と認定し、認定された勇者は国家という大きなバックアップを受けて、カメリア最強の魔術師である吸血姫きゅうけつひめを打ち倒すことを目的とする。

つまり、軍隊を動員してもかなわなかったカメリアに、無謀にも勇者とその仲間数人を送り込むことで、国民の意識をそちらに向け、人柱となってもらおうという政治的背景があるものだった。

しかしそんな勇者でもリウスヴァラではあこがれの的だという。

勇者に選ばれるということはリウスヴァラでトップクラスの剣士または魔術師と国からお墨付きを貰ったということであり、また勇者に選ばれただけで支度金として、ひと一人生涯暮らしていけるだけのお金が手に入る。しかも勇者は必ずしも吸血姫を倒さなくても良く、ただ『打倒吸血鬼』を掲げて邁進すること『だけ』が義務づけられている。たとえ吸血姫を倒せず死ぬこととなっても、支度金を返納する義務もない。おそらく、国としても軍隊を動かすことに比べればたいした額ではなく、そのお金で勇者一人の命を買ったと思えば安いものだろう。

このため、多くの名誉とお金を得ることができる『勇者』になりたいと願う者は後を絶たず、結果、今の人気に繋がっているのだという。

ちなみにアリアスは半年前の剣術大会で優勝し、そこで国王の目に留まり、彼を今回の勇者にすることに決めたらしい。

『リウスヴァラも大変なのね。同情はしないけど』

『対話の席にも着かず、一方的に宣戦布告してきたのはあちらですからね。それよりも、今もリーダー様を狙っていたなんて知りませんでした。……ああ。そういえば、希にですが、城壁の門を守護する兵士から、不審な一行を追い払ったなどという報告があったような……。もしかしてそれが勇者だったのでしょうか』

『もしそれが本当だとしたら、リウスヴァラもその勇者も、底が知れてるわね』

『カメリアの首都までたどり着いただけでも、賞賛するべきでは？』
『ふふ。そうかもしれないわね』

口を揃えてリウスヴァラに冷淡な態度を示すリーダーとティルラ。それも仕方のないことだと思ふ。今の話を聞いて僕の胸にあるのも、リウスヴァラへの敵意だ。

リウスヴァラがカメリアへ戦争を仕掛けた理由は一つ。カメリアの豊富な地下資源だ。

カメリア領土内の地下には、魔力石の元となる魔鉱石と魔装具の核である循環石が大量に埋蔵されている。これがカメリアの収入源であり、またカメリアが世界でも有数の資産国家である所以だ。

対してリウスヴァラは地下資源に乏しく、前述した通りの財政難に見舞われていたため、カメリアの地下資源は喉から手が出るほど欲していた。

そこでカメリアの領土を奪うために宣戦布告したわけだけど、もちろんカメリア側はそんなことを望むはずもなく、平和的に解決するために会談の場を設けようとリウスヴァラに何度も打診した。けれどリウスヴァラはこれを拒否。徹底抗戦を示してきた。

こうしてリウスヴァラはカメリアとの戦争に突入したわけだ。

『それにしても、周りの様子から察するに、自国に不利な話は国民には届いていないようね』

『おそらく規制されているでしょう。あの国はそういうところですよ』

いつの間にか僕とティルラ、アリアスの周りには剣士と魔術師による人だかりができていた。彼らはルノンクール出身である僕に、おそらくは親切心からアリアスの説明に補足してくれた。

たとえば現在リウスヴァラが貧困に喘いでいるのはカメリアが一方的に国交を断絶してきたからだとか、カメリアの国民は吸血姫に騙されているだとか、勇者は吸血姫を倒すまでには至っていないが、確実に成果を上げてきているだとか、吸血姫はそれはそれは恐ろしい怪物だとか。

極めつけは、

「まあそんなわけで勇者として選ばれた俺は、まだまだ未熟だが、こうやって各地のギルドの依頼をこなして力をつけ、いつの日か最強のパーティーを引き連れて、カメリアの吸血姫を……いや、魔王を倒すことを心に誓ったってわけだ」

『魔王』。リウスヴァラでは、吸血姫^{リーデ}のことを『魔王』と呼んでいた。

さすがにこれにはリーデも怒りを覚えたようで、
『なんで私が童話の悪役として出てくる、『魔王』なんて悪名で呼ばれなきゃいけないのよ』

『国際問題ですね。今度はこちらから宣戦布告しますか？』

『それもいいわね。魔王なら魔王らしく、首都陥落でもして見せようかしら？』

『リーデが言ったらしやれにならないって……』

ティルラとの二人ならそれくらいできそうに思えるから怖い。

『ま、それは冗談としても、リウスヴァラへの輸出制限は当面の間継続ね。敵に塩を送ることはないわ』

元は親切心から話してくれたことなのに、そのせいで自国の未来がまた少し暗くなったことに彼らはきつと気づかないんだろうなあ……。

……って、よく考えたらこの状況で危険じゃない？ 目の前のアリアスは勇者で、その勇者が倒すべき吸血姫^{まおっ}である僕がその目の前にいる。

そうか。これはゲームでいうところの、序盤に勇者がラスボスと初めて出会い、その圧倒的な力の差に茫然自失になるというイベント……なのかな？ いやいや、それだと僕が最終的^{まおっ}にやられちゃうじゃないか。

とすると……ここで彼を見逃したことで力を付けられ、いつの日かまた僕の前に現れた時に、僕がやられちゃうようなことがないよう今ここでアリアスを……。

『いかにも悪役が考えそうなことね』

『いやだつてそうでしょ？ 話を聞いた限りでは、アリアスはリウスヴァラでの剣術大会で優勝するくらいの腕の持ち主なんだよ？ これ以上修行されて強くなれたら……』

『あのねえ。私がそんなに貧弱に見える？ まあ百歩譲ってエルリ

ーデが言うように、ここで彼を見逃して再び出会ったとき、彼が私と同等以上の力を身につけていたとしましょうか。たとえそれでも、私が勝つでしょうね』

そう言ったリーデの声は凜としていて、少しも揺らいではいなかった。

『どこからそんな自信が湧いてくるんだか……』

『それが人の上に立つものとしてのあり方よ』

きつとリーデが目の前にいたら、ふんつとない胸を張っていたに違いない。

『ない、は余計よ』

はいすみません。謝りますから変な力使って頭を痛くしないでください。

第2話 魔王と勇者 part 8

それは突然、内心では勇者をやるかやらないかとか、輸出がどうだとかと、結構黒いことを考えながらも、表面上は周りに合わせて相槌を打ち親しげに雑談をしていた時だった。

「た、大変だ！ 魔物が現われたっ！」

息を切らして走り込んできた男の声に、ギルドにいた全員が反応する。ある者は彼に走り寄り、またある者は関わりを持つことを避けるように、足早にギルドを去って行った。

「どんな奴だ！？」

そんななか、勇者らしく前者の行動を取ったアリアスは、真っ先に男性の元へ向かうと彼の肩を鷲づかみにして叫んだ。

「い、犬。黒くてでかい犬だ。顔が二つあって尻尾が蛇の、見るからにおぞましい魔物だ！」

「おそらくケルベロスね」

リーデが呟く。

ケルベロスと言えば、ギリシャ神話に登場する地獄の門の番犬だ。ただしそれは僕の世界での話。こちらではどうなのだろう。

「ケルベロスは神話にも出てくるし、実在する魔物よ。アストラル界へと続く門、『精霊門』を守っていると言われているわ」

「強いのか？」

「そりゃあ『精霊門の番犬』と言われるぐらいなもの。強いわよ。でもおかしいわね。こんなところにケルベロスみたいな^{ダブルビー}BBランクの魔物が現われるだなんて」

魔物とは人へ害をなす異形の獣の総称であり、その多くが高い身体能力を持ち、人間を見つければ即襲いかかるような凶暴な性格をしている。

魔物はその討伐難度によってS A B C Dの五段階で表される。最低のDランクでも一般の剣士（魔術師）でようやく勝てるほどの強さであり、Cランクでは熟練の剣士（魔術師）、Bランクでは剣士と魔術師のペア、Aランクでは複数の剣士、魔術師によるパーティ、そして最高位のSランクにもなれば、国家の兵団を動員しなければ勝つことが難しい凶悪な魔物となる。

ちなみにB Bランクは、^{ダブルビー}AとBの間であることを意味する。つまり、ケルベロスには最低でも熟練の剣士と魔術師のペアでなければ勝つのは難しい。それほどの魔物となる。

『誰かが精霊門を開いて召喚したのでしょうか？』

『召喚魔法はそう容易く出来るものじゃないわ。それに、こんな片田舎でなんの価値もない町に、ケルベロスを送り込む理由が分からない』

酷い言いようだ。田舎は田舎で良いところもあるのに。

……それにしても、「送り込む」とはどういう意味だろう。

まさか

『ね、ねえ。それって人間が人間を襲わせるために、魔物を送り込んだかもしれないってこと？』

『ええ。人間だもの。なかにはえげつないことを考える人もいるわ』
そんなこと……と呟きかけ、ぐっとこらえる。

リーデの言うとおりだ。人は自らの利益のためなら、時には酷く残酷になれる。僕がいた世界でもそうだった。同じ人なのに、自分のため、自国のためと、他人を、他国を、公然と犠牲にする。それは悲しいことだけど、事実なんだ。

『エルリーデ。探知魔法^{ディテクション}を発動し、今できる最大範囲で展開して。ケルベロスの位置と数の特定、そしてその周辺に異常がないか探るのよ』

生物は皆魔力を大なり小なり持っている。探知魔法は、生物が持つ魔力を探ることで遠くにいる生物の位置や特徴などを知ることが出来る魔法だ。

『わ、わかった』

喧騒のなか、僕はカモフラージュ用の魔装具の杖を手にして立ち上がり、部屋の隅へと移動する。誰も僕を見ていないことを確認して、こっそりと探知魔法の詠唱に取りかかる。

『ディテクション
《探知魔法》』

一瞬体が淡く光り、視界がセピア色に変わる。魔法の発動を確認し、効果範囲を町全体からさらに広げていく。

『……これかな？』

『ええ、それで間違いないわ』

しばらくして、明らかに人のものとは違う、大きな魔力を発見する。そしてその近くには小さな魔力がいくつかと、人が魔物が判別不能な、変な魔力を感じる。

『これは精霊門の跡ね。けれどこの形状は人為的に作られた物じゃない。おそらくは自然にできたものとみて間違いないわ』

『ということは、誰かが召喚したわけじゃないってこと？』

『ええ。希に自然と開く精霊門が、運悪くこの町の近くに現われただけ。良かったわね。悪人を見なくて済んで』

『ま、まあね……って良くないよ！ ケルベロスがいることは事実なんだからっ！』

ケルベロスはどうするのか。一番の問題はそこだ。もちろん魔物なのだから倒すことになるわけだけど……実は僕、この世界に来てまだ一度も魔物に会ったことがないし、なにより『戦う』なんてことを元の世界を含めてやったことがない。喧嘩でさえ一度もしたことがないんだから。

『さすがに初戦がケルベロスは無理……だよな？ だからリーデ、今回ばかりは面倒がらずに交代し』

『ああ、言い忘れていたわ。私、外に出られないのよ』

この一大事に、さらっと爆弾発言が飛び出す。

『で、出られないってどういうこと！？ リーデが僕と交代しないのは、体を動かすのが面倒だったからじゃないの！？』

『もちろんそれもあるわよ？　ただ、それプラス、まだエルリーデと私が完全に同化しきれていないせいで、魂が不安定な状況にあるのよ。それで、私があなたに代わって外に出ることができないのよ』

『そ、そんなあ……』

ダブルビー

つまりこれって、僕がBBランクのケルベロスと戦えってこと？
初陣で？

『ちなみに百パーセント無理って訳じゃないのよ？　たぶん代わろうと思えば代われると思う』

『ほ、ほんと！？　じゃあ』

『そのかわりに、魔力どころか直接魂に傷を負うことになると思うけど……それでも代わってみる？』

『……え？』

魂に傷を負う。それは命を削るということ。リーデと交代するためには、そんなに大きなリスクを背負わないといけないのか。

『どうするの？　やってみる？』

『う、うーん……』

軽いリーデの言葉。僕は少し思案してから、

『……やめとく。どうせ命を削るなら、前向きにケルベロスに当たって碎けてみるよ。凄く不安だけど』

僕の返事を聞いたリーデは、『よしよし』と僕の応えに喜びを示した。

その後僕とリーデは、ティルラを交えて作戦会議を始めた。

『まずティルラをおとりにして、ケルベロスを町の近くまで誘い込んで』

その時だった。

『お、おい！　どうするつもりだ！？』

『決まってる。魔物を退治するんだよ！』

男の大声に振り返ると、アリアスがクレイモアを手に、ギルドを出て行くのが見えた。

まさか一人でケルベロスを倒しに？ 命知らずも良いところだ。さつき探知した限りでは、ケルベロスの他にもいくつか小さな魔力があった。きっとケルベロスと一緒にやってきた魔物だろう。いくら剣術大会で優勝したアリアスでも、ケルベロスとその魔物を同時に相手することは無理なはずだ。

けれど、ギルドを颯爽と出て行くアリアスは、見ていて悪い気はしなかった。町のために誰よりも先に魔物退治へと向かうその姿は、僕が想像していた勇者そのものだったから。

このまだと彼の行動はただの自殺行為だけど、きつとみんなの憧れの的である勇者が魔物を退治しに行ったと分かれば、きつと他のみんなも彼を助けるために、彼に続いて

「うわっ、あいつ一人で رفتちゃったよ」

「さすが勇者様。やる事が違うね」

けれど僕が見たのは、彼が出て行った扉を横目に雑談を続ける人々の姿だった。

「あいつ死ぬんじゃない？」

「たぶんな。大人しく町で迎え撃てば良いものを。そうすりゃ町民も焦って、備蓄してる高価な魔術札を俺らにくれるつてのに」

「魔術札つてたけーからな。町を助けるならそれくらいのは貰わないと割に合わないつての」

……何を言ってるんだこの人達は？ さつきまで仲良く話していたアリアスを、こんなに簡単に見捨ててしまうのか？

『でも彼らの考えは間違っていないわ。ケルベロスを倒したとして、この小さな町が彼らを満足させるだけの謝礼を払えると思う？ 無理よ。それを彼らも分かっている。だからどの町にも緊急用に備蓄してある魔術札を、報酬の代わりとして受け取るうとしているのよ』
でも……

『自分の命がかかっているのです。正義感だけで彼に続くのは、バ

力のすることです』

バカ、か……。そうだよ。バカだよ。

『ええ。バカよ。一つしかない命を粗末にする大バカよ』

うん。彼はバカだ。でも、それでも、

『けれど、今あなたは彼を助けたいと思っている。そうでしょ？』

『え……。う、うん……。』

リーデが僕の心を読めることを分かっている、心の隅で思っていたことを言われて動揺する。

『それはどうして？ 私達にとって、ここは守る必要のない敵国の町。そして勇者は、いつか私達に刃を向ける男。どちらを助けても私達にメリットどころか、自らの首を絞めることになるわよ？』

『うん。それは分かっているんだ。分かっているんだけど……。』

『けど？ あなた自身もさつき、勇者は生理的に受け付けないって、そう言ってたわよね？ それなのに何故？』

僕を挑発するように、話の先を促すように、リーデが問いかける。

『そこに困っている人がいて、それを助けようとしている人がいる。できるかどうか分からないのに、死ぬかもしれないのに、たった一人で向かってる。そういう人達には、敵だとか味方だとかはあまり関係ないと思うんだ。困っている人がいれば、たとえそれが知らない人でも、嫌いな人でも、手を差し伸べたくなる。差し伸べられる手があるなら、そうしたい。そのせいで、後で僕が困ることになっても。それじゃだめかな？』

そう言ってティルラを見つめ、その瞳に映る僕を見つめる。

『あなた、喧嘩さえしたことないんでしょ？ それで戦うっていうの？』

『僕が無理でも、僕には魔王と恐れられたリーデが付いている。リーデがいれば、嫌でも僕はこの手を振り上げるよ』

僕が笑う。瞳の中の僕も笑う。

『そう。……だったら、急いで勇者の後を追うわよ！』

『う、うん……。』

リーダーの力強い声に押されて、僕は走り出した。

第2話 魔王と勇者 part 9

『ティルラはここで待機。西にも魔物がいたから、その対処よろしく』

『分かりました』

手を前で揃えて深々とお辞儀するティルラ。

「エルリーデ様。お氣をつけて」

「うん。ティルラも」

少しだけ心配そうなティルラに見送られて町を出る。町の外は鬱蒼とした森が広がっていた。

これは迷子になりそうな森だな……。ところで、颯爽と出たはいものの、ケルベロスがいた方角はどっちだっけ？

『北よ。ほら早く移動魔法を使ってケルベロスの元へ向かうのよ』

『移動魔法？』

『五十三ページ、移動魔法』
スレイプニル

『ああ、あれか。分かった』

立ち止まり、右手を広げて前に出す。

『《移動魔法》』
スレイプニル

右手前方の空間が光りを発し、その中から八本足の馬が現れる。

「うわぁ……」

馬をこんな間近で見たのは初めてだったので、少し感動する。

「……へ？　ち、ちよつと」

見上げるほど大きなその馬は、キョロキョロと辺りを見渡して、足元にいる僕を見つけると、首を下げて頼ずりしてきた。

「な、なに？　なんなの？　……あはは、くすぐりたいよっ」

『ああ、そういえば最近呼んでなかったから。にしても、いくら私の姿をしているとはいえ、スレイプニルはアストラル界の住人。魔力で別人だと分かっているはずなのにこの懐きよう……。あなた、スレイプニルに気に入られたのね』

「そうなの？」

好奇心も手伝って、ためしに頭を撫でようと手を伸ばす。するとスレイプニルがさらに首を下げて撫でやすい高さにしてくれた。

「よしよし」

気持ちよさそうに目を細めるスレイプニル。僕を慕うその姿に自然と頬が緩む。

「かわいいなあ……」

毛並みも良くさらさらで触り心地が良い。もっとごっごっしてるのかと思った。

『……まあ可愛がってくれるのは嬉しいけど、早くしないと勇者死ぬわよ？』

「ああ。そうだった！」

あまりにもスレイプニルが可愛すぎて、アリアスのことが記憶の彼方に飛んでしまっていた。

「……でもこれ、どうやって乗るの？」

明らかに普通の馬よりも一回りも二回りも大きいスレイプニルを見上げて呟く。せめてもう少し身長があれば、ジャンプして鞍に掻き付いて、なんとか乗れそうな気がするけど、さすがにこれじゃスレイプニルの背中に手が届かな

「……ん？」

突然スレイプニルの頭が僕の手から離れた。それと同時に彼の背中が僕の胸の辺りにまで下がってくる。

不思議に思っただけで視線を巡らせる。するとなんと、スレイプニルは膝を折って地面に付けた姿勢で、まるで僕に「乗って」と告げているように、じっと見つめていた。

「乗って良いの？」

スレイプニルが小さく頷く。「ありがと」と言っただけで背中に跨がり、手綱をしっかりと持つ。

「……あれ、立たないの？」

動かないスレイプニルに首を傾げる。

『はあ……』

頭の中に大きなため息が響いた。

『なにそのため息は？』

『スカートを履いているのに跨がる姫がどこの世界にいるって言うのよ……』

『へ？……　　つつ！？』

視線を下ろし、その意味を理解した僕は慌てて足を揃えて座り直す。

それを待っていたのか、ゆっくりとスレイプニルが立ち上がる。

『……ねえ、スレイプニル』

彼は律儀にこちらを向く。

『……見た？』

そう言つてスレイプニルを睨む。彼は首を傾げて前を向く。

『スレイプニルに聞いてどうするのよ……。大丈夫、見えてないわよ』

『それなら別に良いけど……』

まだ心にもやもやが残っているけど、仕方ない。早くアリアスの元へ行こう。

すーはーすーはーと深呼吸を繰り返し、手綱を握りしめる。

『それじゃお願い、スレイプニル！』

手綱を引く。スレイプニルがそれに応えるように嘶いななき、その力強い八本足で大地を蹴った。

アリアスの元へとたどり着いたとき、彼はクレイモアを構えてケルベロスと対峙し、その周りをケルベロスより一回り小さい魔物によって囲まれていた。

『間に合った！　リーデ、あれは？』

『Dランクのライラプスね。見た目はちょっと大きいただの犬だけ』

ど、れっきとした魔物よ。逃げると言うことを知らないから、数が揃うと厄介なのよね」

ライラプスは視界に映る限りでも五、六匹はいる。

『数、揃っちゃってない？』

『ライラプスは群れで行動するから』

『それって『数が揃うと』っていう前置きじゃないと思う』

スレイプニルの背中では立ち上がり、飛び降りる。

「ありがと、スレイプニル！」

軽く手を振ると、彼は小さく嘶きながら光の粒となって消えた。

「エ、エルリーデ！ どうして君がここに！？」

僕に気づいたアリアスが驚愕の表情を貼り付けて叫ぶ。

「どうしてってそれは……って前見て前っ！」

その隙をケルベロスは見逃さなかった。ケルベロスは右前足を振り上げ、その鋭い爪をアリアスめがけ、今まさに振り下ろそうとしている。

ど、どうする？ アリアスの初動が遅い。このままだとやられてしまう。

だったら僕がケルベロスの動きを止めるしかない。けど、僕とケルベロスの線上にはアリアスがいる。直線的な魔法は使えない。

それなら

「アリアス、耳塞いで！」

そう叫んで右手を空に伸ばす。意図を理解してくれたのか、アリアスが耳を塞ぐのが見える。

右手を勢いよく振り下ろす。同時に、ケルベロスに雷が落ちる。

空気を切り裂く轟音が耳の奥まで響き、落雷の衝撃で地面が震えた。

「す、すごい……」

砂埃が舞い上がり、視界の悪くなった先の方から、アリアスの眩きが聞こえる。

やがてアリアスの姿が見えるまで視界が回復し、雷が落ちた場所を見ると、

『……はずれた？』

そこにはライラプスが一匹力尽きて倒れていた。
ケルベロスを狙ったのに、見事に位置がずれている。

『でも当初の目的だった、ケルベロスへの牽制にはなったんじゃない？』

ケルベロスは僕達を警戒して後退し、距離を取っている。

『ねえリーデ。魔法を外さない良い方法はないの？』

『それを私に聞く？ 細かいことは嫌いだってこの前言ったでしょ？ 私の得意分野は広域魔法。狙いなんて付ける必要はないのよ』

『不器用すぎる……』

不平を並べながらアリアスの元へ向かい、彼の背後を守るように背中合わせになる。

『あいつ、刃が通らないんだ』

アリアスがケルベロスを睨み付ける。よく見るとクレイモアが少し欠けている。

『ケルベロス相手に普通の武器でやりあおうということ自体おかしいのよ』

見たところアリアスは魔術札ソーサリーカードを持っていない。生粋の剣士のように。唯一の武器は刃の欠けたクレイモア。それはつまり、ケルベロス相手にはほとんど役に立たないことを意味している。

周りをうろつろされるよりは良いか。

そう考えた僕は、

「アリアスは周りの犬をお願い。あれは僕がやる」

「な、エルリーデ、君は何を」

何かを言いかけたアリアスが動きを止める。不思議に思っ振り向くと、

「杖、魔装具はどうしたんだ？」

魔装具？ ……ああ。そういえばギルドに忘れてきてしまった。

すでに魔法を使っているところを見られてしまっているの、正直に嘘をついていたことをばらす。

「ごめん、嘘ついて。僕、魔導師なんだ」

「魔導師……。君があの世界に数人しかいないと言う、魔導師、なのか？」

「？ うん」

やけに驚いているようだけど、とりあえず頷く。

「……分かった。君の言うとおりにする。小さいヤツは俺に任してくれ！」

そう言うときアリアスはライラプスの集団目がけて駆けだした。

……まあいいか。

やけに聞き分けの良かった彼の後ろ姿を見送り、そしてケルベロスに向き直る。

体が少し震えているのが分かる。でも、意外と恐怖は感じなかった。もしかすると武者震いというやつなのかもしれない。

ぺろっと乾いた唇を舐める。なんだ。結構余裕あるじゃないか、

僕。

「これが初陣だから、お手柔らかによろしく。ケルベロスさん」
僕の言葉を理解したかのように、ケルベロスが咆哮を上げた。

第2話 魔王と勇者 part10

二つの頭を持つケルベロス。その姿は何かの本で見たようなケルベロスそのままで、漆黒に染まった巨大な体躯には所々に血のような線が入り、表皮が高温なのか、全身から陽炎が立ち上っている。足先の爪は大きく鋭く、地面に突き刺さっており、尻尾の蛇はこちらをじっと睨んでいる。

そういえばと、ふと思い出した。

『頭が一つ足りない？』

ケルベロスはたしか三つの頭を持っていたはず。今日の前のケルベロスには二つの頭しかない。これだとオルトロスだ。

『ええ。三つ目の頭は平常時には隠れてる。気をつけなさい』

どう気をつけるって言うんだろ。まあ、何があってもすぐ対応できるよう、気にはしておくことにする。

右の手の平でバチバチと火花を飛ばし、それをぎゅっと握りつぶす。

うん。調子はそこそこ。悪くないと思う。

魔法に関してはまだまだ初心者だけど、なんとなく自分の今の調子の善し悪しは感覚で分かる。

視線をケルベロスへと向け、その動きを注視する。

数秒後、右側の口が大きく開き、そこから火の玉が発射された。相殺するために火炎魔法を詠唱して真っ向からぶつける。ボンツという破裂音とともに互いの火球が消滅する。

「ふう……」

上手くいった一息つく。その時、上空が一瞬光を放つ。

『上よ！』

リーデの声が響くのとほぼ同時に、風撃魔法を地面に叩きつけ、後方へ飛ぶ。数瞬後、僕のいた場所に雷が落ちる。

間を置かずに前方から火の玉が迫ってくる。体勢を崩し、膝をつ

いていた僕は、その体勢のまま地面に両手を付き、正面に氷の柱を生成する。火球が氷の柱に衝突し、氷の柱が粉々に碎かれる。殺しきれなかった衝撃が僕を数メートル後ろへ吹き飛ばした。

「いたた……」

『後手後手じゃない』

『は、初めてなんだから仕方ないでしょ……』

したたかに打ち付けた腰をさすりながら立ち上がる。パンパンとスカートについた埃を払い、ケルベロスを見据える。

僅か数メートルの距離で睨み合う僕とケルベロス。すぐに対処できるよう、弾速の速い雷撃魔法を半詠唱の状態で構える。体が淡い光で包まれる。

今の僕が使う魔法には、世間一般的な火水風土雷氷の六属性があり、それぞれに特徴がある。

火属性の火炎魔法は、火の玉を飛ばす魔法で威力は高いけど、すぐに逸れてしまうため命中精度が悪い。雷属性の雷撃魔法は、落雷の魔法で弾速が速く、上空から落とすので敵の虚をつきやすいけど、ピンポイント過ぎて当てにくい。氷属性の氷結魔法は、対象を凍らせて動きを止めることが出来るけど、直接接触しないと発動しない。風属性の風撃魔法は、風の玉を飛ばす魔法で命中精度は高いけど、威力と弾速が安定しない。水属性の水撃魔法は、前方へ放射状に無数の鋭利な水滴を飛ばす魔法で弾速も威力もそこそこあるけど、前方数メートルにしか効果がない。土属性の波動魔法は、地震を起こす魔法で効果範囲は広いけど、発動までに時間を要し、大きな隙ができてしまう。

並べてみるとどれも弱点だらけで使いにくいものばかりだ。だけど僕が使える攻撃魔法はこれらのDクラス、一番低いクラスのものしかない。それ以外の魔法は、まだ一度も使ったことがないのだから。

ちなみにこのクラスとは、魔物の強さを示すランクと同様にS A

BCDの五段階となっている。魔術師であれば誰でも使えるDクラスから始まり、レアスキルと呼ばれる希少価値の高い魔法のAクラス、魔導師にしか使えないというAよりさらにレアなSクラスと、魔法の詠唱及び発動の難度によって分けられている。

Dクラスの雷撃魔法を構えていると、突如ケルベロスが雄叫びを上げて地面を蹴った。

速いっ!?

その一蹴りで僕との距離を一気に詰め、アリアスよりも一回りも二回りも太い前足を振り上げる。

雷撃魔法を握りつぶして魔法を切り替える。右手を右から左へ払い、水撃魔法を発動する。

針のように尖った水滴が無数に現われ、それを扇状にばらまく。

けれど少し遅かった。水撃魔法がケルベロスに届くのと、ケルベロスの鋭い爪が僕を捉えるのはほぼ同時だった。

体を無理矢理捻って振り下ろされた足を躲^{かわ}す。肩口に爪がかすり、そのまま左腕に沿って袖が引き裂かれていく。

「っ!?!」

左腕から痛みが発し、顔をしかめる。腕を庇いながら後方へ飛ぶ。水撃魔法をまともに受けたケルベロスはその水圧で数メートル後退しながらも、四本の足でしっかりと立っていた。

前方に意識を向けたまま、ちらりと左腕を見る。黒と白しかかった色に赤色が加わっている。

見た目はとても痛々しいが、神経が麻痺しているようで、痛みはまったく感じなかった。

『出血には注意しなさい』

『分かってる』

以前、お城で本を読み漁っていた頃、とある吸血鬼が書いたと思われる書物にこう書かれていた。

『吸血鬼は他の種族よりも魔力、身体能力ともに高く、特に環境

適応能力は群を抜いている。また特筆すべきはその再生能力であり、たとえ剣で体を貫かれようが腕や脚を千切られようが、頭部さえ無事ならば、個体によって数時間から数年という差異はあれど、受けた傷は全て再生してしまう。しかし吸血鬼にも弱点は存在する。吸血鬼の名の通り、他者の血を定期的に体内に取り入れなければ、魔力、身体能力、環境適応能力その全てが常人以下となってしまふ。そのため出血に弱く、血を流せば流すほど、吸血鬼は吸血鬼としての力を弱めてしまふ』

未だ吸血行為をしたことがない僕だけど、食事時に出してくれる赤い飲み物にティルラの血が入っているらしく、おかげで僕はこうやって普通に動いている。とはいえ、量としてはそれほど多く取り込んでいるわけではない。出血は極力避けるべきだ。

『手は動く?』

左手に力を入れる。

『……だめ。血も止まらないし、結構深く入ったみたい』

『完全ではないとはいえ、魔力障壁を破ってくるなんて。さすがケルベロスね』

魔力障壁? ああ、そういえばリーデが僕のためにずっと張ってくれているんだっけ。

いくら吸血鬼のリーデでも、この怪我は数分や数時間そこらで治るものではない。出血を止める必要もあるし、左腕は諦めるしかない。

右手を左腕に添え、氷結魔法を唱える。傷口を氷が塞ぎ、出血が止まる。代わりに、これでもう左腕は動かない。

『やっぱり初戦からBBランクは、ちょっと荷が重かったかな……』
汗が頬を伝い流れ落ちる。感覚をなくした左手に不安を抱える。

『早くも泣き言? まだ始まったばかりじゃない』

リーデの声が軽い。僕の心が分かるからだ。

『泣き言なんて言つてないよ。ただ、せつかくの服を破いちゃったから、あとでティルラになんて言おうかな、ってね』

『ああ。そうね。直すのはティルラだものね』

『怒られそうだったら、リーデ助けてよ？』

『はいはい』

何故だか分からないけど、負ける気はしなかった。

第2話 魔王と勇者 part 11

精霊門の番犬という名は伊達じゃなく、僕の頭上から振り下ろされる足は、当たればこの世から即さようならできるんじゃないかと思うほどの速さと音をさせて耳のすぐ横を通り過ぎていった。

いくら吸血鬼が人間よりも身体能力が高いと言っても、所詮は小柄な女の子。鼻^{ひいき}真^ま目に見ても、一般成人男性より少し上回っている程度な僕の身体能力と魔法では、ケルベロスの猛攻を防ぐだけで手一杯だった。

風撃魔法をケルベロスと地面に打ち付け、その反動で後方へ下がり距離を取ると同時に、足止めに氷結魔法で前方の地面を凍らせる。そのままケルベロスの足も凍らせようと思ったが、魔法が届く前に避けられてしまった。

「あー。もう少しだったのに。このっ！」

ケルベロスに目がけて雷撃魔法を唱える。

どうせ避けられるだろうと思いつつ放った八つ当たりの一撃は、意外にも油断していたケルベロスの頭に直撃する。

けれど、

「……無傷ってどういうこと？」

呆然と見つめる先で、ケルベロスがキョロキョロと空を見上げる。言葉か喋れたら、きっと「何か当たった？」とでも言ったに違いない。

戦闘が始まって数分。防戦一方とはいつつも、それでも何度かケルベロスに魔法を命中させている。それなのに、未だケルベロスに目立った外傷はなく、むしろほぼ無傷のままだった。それにひきかえ、僕なんて左腕が凍って（凍らせて）動かないっていうのに。

「まったく効いていないけど、どうするつもり？」

「さあ、どうしよう」

緊迫した状況とは裏腹に、リーデと僕は相変わらず軽いノリで話

している。僕はともかく、戦争を経験しているリーデにとっては、これくらいのことは別段騒ぎ立てることでもないのかもしれない。

『雷撃、風撃、水撃の魔法が効かないのであれば、単純に威力の強い火炎魔法をやってみたいところだけど……まあ十中八九効かないよね。見るからに耐性ありそうだし』

それ以前に、火炎魔法はあたるかどうかという問題もある。

『こうなったら、アレしかないわね』

『だいたい予想は付くけど……アレってなに？』

嫌な予感がしつつも、仕方なく聞いてみる。

『Dクラスの魔法が効かないのなら、SやAクラスの魔法を使えば良いじゃない。例えば重力魔法とか』

『無理。死ぬ。いや死にはしないと思うけど……いや、やっぱり死ぬ。僕も死ぬしアリアスも死ぬ』

重力魔法とはAクラスの、その名の通り重力を操作する高出力型広範囲殲滅魔法だ。指定範囲内に常時の数十倍の重力を発生させ、対象を圧壊又は圧死させる。至ってシンプルな魔法のためAクラスに属するが、その消費魔力や威力からすると、十分Sクラスに分類されてもおかしくない魔法である。もちろん、こんな一対一の戦闘で使うような魔法ではない。

第一、AやSの高難度の魔法は、僕にはまだ使うことが出来ない。リーデが寝ているとき、こっそり一度だけAクラスの魔法をためたことがある。結果は失敗。しっかりと魔法をイメージできたはずなのに、文字が綺麗に浮かばず、中途半端な詠唱になってしまったのだ。そのためすぐに中断して、あの時は何事もなく終わったけど、もしあのまま魔法を発動していたら、不完全に発動した魔法が起こす『反射』によって、おそらく僕は死んでいただろう。

『反射』とは、不完全なまま魔法を発動した際に起こるものであり、魔法を発動した本人に、発動した魔法の一部の魔力が逆流し、身体に損害を与える現象を言う。この反射は、一般的に魔力消費の大きい高難度の魔法ほど逆流する魔力が多くなるため、難度に比例

してその被害を拡大させる。特にAやSクラスになると死亡する場合もある。

『戦いに犠牲は付きもの。ここは彼とエルリーデに尊い犠牲になってもらおうじゃない』

『いやいやいや。僕が死んだらリーデも一緒に死んじやうじゃないか。それに、アリアスに犠牲になってもらっちゃだめなんだって。僕がここにきたのはアリアスを助けるためなんだから』

『そういえばそうだったわね。忘れてたわ』

白々しい嘘をつくリーデ。

『それに、リーデ言っでなかったっけ？　そういう高難度の魔法は使えないようにしてあるって』

以前にそう言われたことを思い出しながら言う。

『あー……あれは嘘よ』

『嘘なの！？』

『私にそこまでの権限はないわよ。だってあなたがこの前使った爆裂魔法、あれCクラスよ？』

爆裂魔法はコルデイリアへ来る途中、船の上で魔法の実習をしていたときに使った魔法だ。あの時は意識してなかったけど、あれCクラスだったんだ……。

『まっ、AやSを使えとは言わないわ。でも、ケルベロスに倒すにはDよりも上のクラス、出来ればBクラスがほしいところね』

『C飛ばしてBですか……』

それはさすがに反射が怖い。たぶん死にはしないだろうけど、下手すると腕の一本は吹き飛ばんじやないだろうか。

『今のあなたがケルベロスを倒すには、それくらいのリスクは覚悟しないといけないってことよ』

ちよつとハイリスク過ぎる気が……。

その時、油断していた僕にケルベロスが凍った地面を飛び越え距離を詰めてきた。

僕の目前に迫ると、その大きな右前足を振り上げる。

まずい。避けられ

『エルリーデ、^{アブソーバー}防御魔法を！』

『ア、《^{アブソーバー}防御魔法》！』

前方に赤みがかった透明な壁のようなものが現れる。

ケルベロスが腕を振り下ろす。振り下ろしたその腕は透明の壁を破壊し、延長上にいる僕を襲った。

「ぐっ！」

咄嗟に顔をガードした右腕に重い一撃を貰う。それでもなんとか踏みとどまった僕はケルベロスの足に触れて氷結魔法を唱える。

「もう一つ。《^{ブラスト}爆裂魔法》！」

凍らせた腕に爆裂魔法を発動させる。ケルベロスの腕が赤く光り、爆音を伴って破裂する。

「いった……」

間近で爆裂魔法を発動させたせいで、その二次被害によって数メートル吹き飛ばされる。腰を押さえながら立ち上がり視線を下ろすと、左腕の氷が溶けて傷口から血が流れていた。

再度氷結魔法で傷をふさぎ、ケルベロスへと視線を向ける。

^{アブソーバー}防御魔法、^{ブラスト}爆裂魔法、ともにCクラスの魔法だ。^{アブソーバー}防御魔法は一度だけ攻撃を受け止め、その衝撃を吸収する魔法。^{ブラスト}爆裂魔法は対象の

内部で爆発を起こす魔法だ。^{ブラスト}爆裂魔法は発動までに時間がかかるから、凍らせて動きを止める必要があった。

『ありがとリーデ。^{アブソーバー}防御魔法がなかったら死んでたよ』

『^{アブソーバー}防御魔法と魔力障壁でなんとか、か……力だけはAランクね』

視線の先には右前足を無くしたケルベロスが立っている。あれだけの衝撃だったのに、あまり位置が動いていないように見える。

『足がなくなっただから、倒れるくらいしてみせ……』

突然ケルベロスが全身を震わせ始める。左右の頭がそれぞれ外側を向き地響きを伴ってより一層強く振動させる。

耳の奥にまで響く咆哮のあと、左右の頭の間から、もう一つの頭が姿を現した。

『……気持ち悪い』

「うん、きもい」

頭が三つ揃ったケルベロスを見て、僕達が抱いた思いは、恐怖や驚きよりも、首の付け根から三つ目の頭がニョキニョキと現れた気持ち悪さだった。

第2話 魔王と勇者 part 12

「頭が一つ増えたから、強さが倍になるってことは……ないよね？」
細く鋭い目を僕に向け、大きな牙を見せながら唸り声を上げるケルベロスを見て呟く。

前足を一つ失って、少しはたじろぐのかと思いきや、そんな様子は微塵も見せずに、怒りの矛先を僕に向ける。

「ないわよ。ただ……」

「ただ？」

「三つ目の頭が出てくると、必ずある魔法を使うのよ」

魔法？ 魔法なら今までもケルベロスは火炎魔法を使っていたと思うけど。

「今までよりも数段強力な……ね。高出力型よ。当たれば防^{アブソーバー}御魔法も魔力障壁もひとまりもないわ」

あの防^{アブソーバー}御魔法と魔力障壁の二段構えの防御が効かないってことは、現状の僕ではその魔法にガードは意味をなさない、ってことか。三つ目の頭がなかったから何かあるとは思っていたけど、そんな切り札をもっていたなんて……。

そうか。この展開はあれだ。ゲームで言うところの、「よく私の体に傷を！ ゆるさん！ 余興は終わりだ！ 全力で葬り去ってやろう！」と、ボスキャラが第二段階に変形して、さあここからが本当の戦いだ、という熱いシーンだ。でも普通そういう展開の場合、第一段階では特に苦勞することもなく、こなせちゃったりするはずなんだけど……今の僕は第一段階だけで満身創痍になってたりする。まあゲームの後半辺りでは第一段階から強かったりするから不思議ではないけど、このケルベロスが初戦だからなあ……。初めからクライマックス間近な敵に遭遇してしまったってことなのかな？

「つまり、その魔法は避けないと死ぬ、そういうことか」

これが画面の中の出来事なら面白い展開だと思う。当事者だから

まったく面白くないけど。セーブしてもう一回とかできないし。

『いいえ、避ける必要はないわ』

リーデから驚きの発言が飛び出す。

『いや、さつき当たればひとたまりもないって』

『そうよ。当たればね。だから避けなくて良い、迎え撃つのよ』

ああ、なるほど。避けずにこちらでも魔法を打って相殺しろってことか。でも防御魔法と魔力障壁が意味をなさない高出力型の魔法を相殺できる魔法というと、最低でもBクラスの魔法が

『相殺ではなく、ケルベロスごと魔法を貫くのよ』

『……へ？』

ケルベロスごと、だって……？

『ええ。これはピンチではあるけれど、それ以上にチャンスなのよ。ケルベロスの高出力型魔法は、発動した後に長い硬直時間がある。そこを狙えば、確実に一撃でケルベロスを倒すことが出来るわ』

理屈は分かる。でも、それをするには……

『ちなみに聞くけど……どの魔法ならそれが可能なの？』

『高出力型長距離貫通魔法。神槍魔法よ』
ブリュナク

ほらきた。神槍魔法は灼熱の槍を超高速度で対象に向かって投擲する、『レアスキル』に該当するAクラスの魔法。実は前に一度試して、『反射』しかけたのがこの魔法だ。

『えっと……リーデ、悪いけどその魔法は前に試したことが……』

『知ってるわよ。あの時はやめて正解だったわね。あのまま発動していれば、死にはしなかっただろうけど、船とあなたの右腕がなくなってたわ』

『お、起きてたんだ……』

反射は自分のみならず、周りにも被害を与えるのか。良かった、使わなくて。

『でも今はそんなこと言ってられないわ。ほら、ケルベロスが詠唱に入ってたわよ』

リーデが言うように、ケルベロスの三つの頭全てが口を開け、そ

の体を淡く光らせた。やがて前方に火球が現れ、徐々にその大きさを増していく。

『さあ、もう時間がないわよ』

焦燥感に駆られながらどうするべきか考える。とはいえ選択肢は二つしかない。今からすぐに全力で逃げるか、反射覚悟で神槍魔法ブリューナクを使うかだ。

リーデが言っていた通りならば、神槍魔法を使えば僕の右腕は吹き飛んでしまう。左腕がもう動かない現状でさらにそんなことになってしまつては、もし神槍魔法ブリューナクを外したとき、僕に反撃する力は残つてはいないだろう。

外せば死ぬ。リスクの高い博打だ。

それでも結局僕は、

『……本番はあまり強いタイプじゃないんだけどね』

ケルベロスから逃げず、迎え撃つことを選んだ。

『良い度胸ね。そうこなくちゃ。でも、どうして危険な方を選んだのかしら？』

僕は意識を前に集中したまま、後ろを振り返る。

そこには数匹のライラプスを相手に孤軍奮闘するアリアスの姿があった。軽装の鎧はぼろぼろで、腕や顔、至る所に切り傷ができ、全身を血で滲ませている。それでも十匹近くはいたはずのライラプスが、残り二、三匹にまで減っていた。単体ではDランクのライラプスも、集合体として見ればCランクに相当する強さのはず。それを一切魔法の使えない生粋の剣士が、魔物相手に有利に戦っている。本当に純粹に剣士としての腕前は一流のようだ。

『ここで逃げたら、彼が死んじゃうしね』

そう言つて向き直る。

火球はさらに大きくなり、ケルベロスを覆い隠してしまう。これではいつ放たれるのか、タイミングが読み取りづらい。

『反射のことなら安心しなさい。私があなたの不足分を補うから、魔力の逆流を少しは抑えられるはずよ』

『本当？ あ、よかつたらついでに魔法の位置の調整もよろしく』
一人で当たらないなら二人でやればいい。咄嗟に思いついたこと
だった。

『良いけど、さすがにそこまですると魔力障壁は維持できないわよ？』

『どうせ意味ないんでしょ？ だつたら良いよ』

『……分かつたわ』

ふつと突然体が軽くなる。おそらくリーデが魔力障壁を解いたのだらう。

『タイミングはあなたに任せるわ』

『了解。いくよっ』

リーデのノートに書いてあった神槍魔法プリューナクのページを記憶の中から掘り起こす。一字一句全てを覚えていたことに驚きつつ、そこに変な絵があつたのを思い出して、プツと吹き出してしまう。

『あれはただの投げ槍だね』

『何か言つた？』

『いいえ何も』

目の前の火球が赤から青に変わる。あちらの魔法は最終段階に入つたようだ。遅れて、こちらも詠唱に入る。

神槍魔法プリューナクは二つの魔法の集合体。所謂いわゆる合成魔法だ。Cクラスの魔法である火炎魔法とBクラスの雷槍魔法ライトニングスピアを重ねることで完成する。

ほとんどぶつつけ本番。だけどやるしかない。

『《雷槍魔法》、セット』

空へと伸ばした右手に青白く輝く稲妻の槍が現れる。と同時に、右腕に痛みが走る。僅かに『反射』が起こっているようだ。

気にせず詠唱を続ける。

『《火炎魔法》、チャージ』

青白い稲妻の槍に、少しずつ炎の赤が混ざっていく。プシュツと缶ジューズを開けたときのような音が聞こえ、ポタポタと赤い水滴が顔に滴り落ちてくる。

質量はないはずなのに、右腕が痺れるくらいに重い。

「くう……っ」

近くにアリアスがいるのもお構いなく、歯を食いしばって魔法の槍を支える。大きく開いた唇の間から覗く鋭い犬歯を彼に見られたら、僕が吸血鬼だということがばれてしまうだろう。

まあその時はその時だ。いざとなればこの国を早々に立ち去れば良いだけのこと。

槍全体に炎が行き渡り、二つの魔法が混ざり合った槍は紫色へと変化する。

『エルリーデ、来たわよ』

意識を前に向ける。ケルベロスから放たれた青い火球が僕へと迫ってきている。

『いくよ、リーデ！』

『いつでも』

いつの間にか血で染まった右腕を前に伸ばし、人差し指をケルベロスへと突きつける。

「《フリーナク神槍魔法》、ファイア！」

頭上で輝く紫の槍が、僕の声に呼応して発射される。空を切り裂く音を耳に残し、ケルベロスが放った火球の中央を貫く。四散する火球の奥にケルベロスの姿を確認した時には、既に槍はケルベロスを貫き、遙か彼方へとその姿を眩ませていた。

体に大きな穴を開けられたケルベロスは、傷口から噴き出した炎によつて全身を焼かれ、やがて弱々しく遠吠えを上げた後、ゆっくりと地面へと倒れた。

第2話 魔王と勇者 part13

「んん……」

瞼越しに光を感じて目を覚ます。ぼやけた視界の先から暖かな光が降り注ぎ、優しい風が頬を撫でる。

起きたその場所は知らない部屋だった。木の板張りの簡素な作り。いつも起きる水陸両用船よりも狭い。コルディリアの宿屋だろうか。目を擦りながらベッドから上半身を起こす。

「……っ！」

痛みが左腕から全身へ駆け巡る。視線を下ろすと、ネグリジェ姿の僕の左腕に包帯が巻かれていた。

他にも怪我はないかと自分の体を調べる。

さすがは吸血鬼だった。再生能力の高さは本当で、傷の深かった左腕以外の傷は完治していた。反射でダメージを負った右手も、昨日あれだけ血まみれだったのが嘘のように綺麗なものだ。

ただ少し頭がクラクラする。船酔いに似た気持ち悪さに頭を押さえる。

そういえば、初めてこの世界に来たときも、同じような気分の悪さを感じてたな……。

視線を巡らせ、ベッドの脇の椅子に姿勢良く座ったまま目を閉じるティルラの姿を見つける。

「初めてだな。ティルラの寝ているところを見るのは」

いつもならカーテンを開け窓を開け放ち、僕に振り返って「おはようございます」と挨拶をしてくれるティルラが、静かに寝息を立てている。いつもより少しだけ垂れた大きな耳に触れると、ピクツと動いて反応を示した。ちよつと面白い。

……ん？ 頬に涙の跡がある。もしかして泣いていた？

それもそうか。昨日だってティルラは泣いていたんだから。

ケルベロスを倒した僕は緊張から解放されたことで、すぐにその場にへたり込んだ。

「はあ……」

大きく息を吐いて空を見上げる。真つ青な晴天。それは僕のいた世界とまったく同じ青空で、さっきまで死闘を繰り広げていた僕の心を落ち着かせてくれた。

『お疲れ様。良くやったわ。上出来よ』

『ありがと』

短く返して、ふとアリアスのことが気になり後ろに振り返る。視線を向けた先には、最後の一匹に斬りかかるアリアスの姿があった。
「うおおおお！」

叫び声を上げながら上段から振り下ろしたクレイモアはライラプスを真つ二つに切り裂き、地面に深々と突き刺さった。ライラプスを全て退治したアリアスは、ゆっくりとした動作でクレイモアを地面から引き抜き、僕同様にその場にへたり込んだ。

あれからさらにアリアスの傷は増えていたけど、見た限りではどれも軽傷、擦り傷や切り傷ばかりだ。おそらく僕の方が重症だろう。左腕は動かないし、右腕は反射のせいで指先から血が溢れて血まみれだ。血を流しすぎたせいかな、頭もクラクラする。

「おつかれさまー！」

血だらけの右手を口元に添えて声を張り上げる。力なく手を上げるアリアスは、僕の姿を見るとギョツとした様子で目を見開き、すぐに立ち上がり僕の元に駆け寄った。

「だ、大丈夫か!？」

「うん。なんとかね」

安心させるように笑顔を作る。けれどアリアスの表情は曇ったまま、僕の両腕に目を向けている。

「……すまない。魔道師だからと、安心してエルリーデに任せた俺

が馬鹿だった。敵の力量も計れないどころか、自分のことで手一杯になって、君に見向きもしなかった」

悔しそうに顔を俯かせる勇者。アリアス

真面目な人だ。行動や性格はほんと勇者らしい。あとは腕前つてところかな。

「仕方ないよ。魔物は物理的な攻撃にはめっぽう強いみたいだから。それなのにアリアスはクレイモア一つでライラプスを全て退治できた。凄いと思うよ」

「……」

あれ？ 一応フォローしたつもりなのにアリアスは余計に落ち込んでしまったようだ。

うーん、困った……。

頭をもしやもしやと掻く。あつ、と気付いたときには遅かった。

銀色の髪に血がべつとりとついてしまった。

気持ち悪い。シャワー浴びたいな……。

ぼんやりとそんなことを思っていたとき、

「エルリーデ様！」

声が聞こえて顔を向けると、遠くから物凄い早さで走ってくるティルラが目に入った。

「ティルラ。町はもういいの？」

「はい。そんなことよりこの怪我は……っ！」

「あはは……ちよつと張り切り過ぎちゃった」

僕のすぐ傍で膝をつき左腕に触れるティルラ。その目には涙を浮かべていて、今にも泣き出してしまいそうだった。

「そんなに心配しなくても。吸血鬼なんだから明日にはほとんど治つてるでしょ？」

『ですが……っ！』

『ティルラ。エルリーデを町までお願い』

『……っ。分かりました』

こういうのを聞くと、リーデがお姫様だとつくづく思う。僕が言

えはなんでもない言葉なのに、リーデが言つと有無を言わせず相手を従わせる力がこもっている。

バインドリリース キャリッジ
「【束縛解除。馬車】」

ソーサリーカード
ティルラが地面に投げた魔術札から馬車が現われる。

「失礼します」

ティルラに軽々と抱え上げられる。アリアスの見ている手前、少し恥ずかしかったけど、暴れる余力もなかったので大人しくする。

座席に座らされ、ティルラが運転席へと移動する。

「乗りますか？」

ティルラが振り返りアリアスに言う。

「いや、俺は良い。自分で歩ける」

「そうですか。では」

ティルラが手綱を握りしめる。町へ向かってゆつくりと馬車が動き出す。少しの揺れを体を感じながら、僕は目を閉じた。

「んん……エルリーデ様？」

身じろぎしてティルラが目を覚ます。まだ寝ぼけているようで、目の前にいる僕を見て首を傾げている。

「おはよう。ティルラ」

「おはようござ……っ!!」

挨拶を返しながら突如目を見開き、ガタツと大きな音を立てて椅子から立ち上がったティルラが、「失礼します」と早口で告げてからパタパタと僕の体を触り始めた。

「ち、ちよつとティルラ、どこ触って」

「……良かった。ほほ傷は完治しているようですね」

ほっとした様子で僕から離れる。けれど左腕を見てすぐに表情を曇らせる。

「……昨日は申し訳ありませんでした。エルリーデ様がこれほどの

大怪我をしてしまったのに、お側にいらなくて」

ティルラが深々と頭を下げる。

「いやあればリーデがティルラに町のことを頼んだからであって、決してティルラのせいじゃ」

「いいえ。あの程度の魔物であれば町にいた傭兵や冒険者に任せておいても良かったのです。わたしがリーデ様の言葉に従ったばかりに……」

ティルラの立場からすると、それで普通だと思っただけ……。

「エルリーデ様も知っていると存じますが、リーデ様には未来を見る能力があります。そのリーデ様が、わたしに町にいるよう命令したことを、わたしは安易に『無傷の勝利』と受け取り、それに従ってしまいました。それがまさかこのような結果になるうとは……」
「またも涙目になるティルラ。いやだからそれはティルラのせいじゃないって。むしろ僕が弱かったせい……」

「ごめんなさい」

溢れた涙が頬を伝う。

ああもう泣き始めた！

慌ててティルラを抱き寄せ、「ティルラは悪くない」と呟きながら、その頭を優しく撫でる。

何度も僕に「ごめんなさい」と謝り続けるティルラに、何度も優しく声をかけながら、結局全てはぼくのせいなんだと自分に言い聞かせる。

この左腕の怪我は僕が油断していたせいでできたもの。そしてもう完治してしまっただけ、右手の怪我は僕が魔法に不慣れだったからできたもの。そしてティルラにこんなに謝らせているのも、僕がそんな大怪我をしてしまったせいだ。

もう少し魔法を上手く使えるように、もう少し上手く立ち回れるように、もう少しティルラに安心してもらえるように。

もう少しだけ、頑張ってみよう。

ティルラの頭を撫でながら、僕はそう思った。

第2話 魔王と勇者 part13（後書き）

第2話 魔王と勇者 完

第1章 エピローグ

「さて、と。じゃあ行こうか」

「はい」

ケルベロスを倒した翌日。僕達は誰が魔物を倒したやらどうだかで騒がしいコルディリアの町を早々に離れて水陸両用船ヘルフラワーへと戻ってきた。

いろいろと面倒くさいからという理由で、町の人々へは何も告げずに出てきた。別に僕達は謝礼を貰いたいわけでも賞賛されたいわけでもなかったから。

まあきつと勇者の手柄ということでも落ち着くだろう。けれどそれで良い。それだけの働きを彼はした。僕一人ではライラプスまでは相手にできなかった。

首から下げた包帯で吊された左腕を見る。次また魔物と闘うことがあったら、こんな大怪我はしないように強くなろう。そう心の隅で誓う。

「どこへ行くんだっけ？」

『コルディリア平原よ』

デッキチェアに腰掛け、ティルラ特性の赤い飲み物をストローを使い口に含む。少しドロツとして気持ち悪いけど、味は良かった。

「では出発します」

操舵席に立つティルラが魔術札ソーサリーカードを手にする。

『【束縛解除

「待ってくれ!!」

聞こえるはずのない声が耳に届く。空耳かと思ったけど、ティルラもその声を聞いたようで、詠唱が中断されていた。

デッキチェアから立ち上がり、船の縁から下を覗く。

そこにはリウスヴァラ共和国の勇者、アリアス・アーレンスがいた。

魔王が勇者を見下ろす。うん。よくあるシチュエーションだ。でもだいたいそういうのって玉座とかそういう場所だと思うけど。

「なにか用？」

全身絆創膏だらけの勇者は、野山で一日中遊んでそうな少年のように見えた。笑ってはいけないのだけど、美形が台無しで我慢ができそうにない。

「……俺、考えたんだ。剣術大会で優勝して勇者となった俺は、長年磨いてきたこの剣の腕前が認められと有頂天になり、いい気になっていた。剣士の地位が低迷し、ここ数年魔術師が勇者に選ばれ続けるなか、剣士な俺が勇者に選ばれて、そのことで『俺だけは違うんだ』と、『この剣だけでやっていけるんだ』と不要なプライドができあがってしまった。そのせいでエルリーデをあんな目に遭わせてしまった。本当にすまないと思っている」

「……別に僕は気にしてないよ」

あまりにも真面目な話に笑いがかき消えてしまった。絆創膏だらけのその顔も、今では勲章のように見える。

「それで考えたんだ。そして決めた。……エルリーデ、いや、師匠！」

「師匠っ！？」

慌てて辺りを見回す。もちろん誰もいなくて、ティルラに視線を向けるも顔を横に振られる。

「俺を弟子にしてくれ！……弟子にして下さい！」

で、弟子い！？ この僕が！？

いやいやいやいや。ち、ちょっと待って。 magari なりにも僕達は敵同士。リウスヴァラの言葉を借りると魔王と勇者の関係だ。それが師弟の関係になるのはさすがにいろいろと世間体的にもだめだと思っ。

「で、でも僕はまだ旅の途中で、魔法もまだまだ練習中で」

「それは分かっています。それでも、世界に数人しかいないという魔導師であるあなたから、魔法をご教授願いたいのです！ いや魔

導師だからではなく、あの魔物に一人立ち向かったあなたに、魔法とは何か教えていただきたいのです！」

「そ、そんなこと言われても、僕は人に物を教えられるほどできた人ではないし……」

「師匠の隣で師匠の魔法を見せて頂くだけでも、それだけでも構いません！ 旅に同行させて下さい！」

……ど、どうしよう。アリアスには僕が人間だとかいろいろと嘘をついている手前、ぼろが出ないうちに離れたいところなんだけど……。

『良いじゃないの。連れて行けば？』

『軽っ！ こっちはどうやって断ろうかと考えていたところなのに！』

『どうして断るのよ。楽しそうじゃない、彼』

他人事のように言ってくれちゃって……ばれて困るのは僕だけじゃない、リーデ様なのに。

『ですがエルリーデ様。リーデ様の考えにも一理あります。目の届く範囲に勇者を留めておくことで、いざというときに対処がし易いという利点もあります』

『う、うーん……たしかに』

僕達が留守中にカメリアへ攻め込まれても困る。まあ攻め込まれようが、そこに僕はいないし、これくらいの腕前であれば心配はないだろうけど……。

アリアスは真剣な表情で僕を見上げている。その背には大きな長剣、クレイモアがある。新調したらしい鎧は綺麗だけど、刃の欠けたクレイモアはそのままだ。

ここで「NO」と答えたら、後味悪いんだろうなあ……。

……はあ。

「次の町まで、そのクレイモア修理できないけど、良いの？」

「……え。そ、それじゃあ！」

アリアスの目が輝く。だからその顔でそれは反則だって。

「すぐに出発するから乗って」

「はい！」

アリアスが水陸両用船ヘルフラワーに乗り込む。

「これで良いんでしょう？」

「なにふて腐れてるのよ」

「べつにいい」

デッキチェアに腰を下ろし、ストローを咥えてズズーツと音を立てる。

やっぱりドロツとしていたけど、美味しかった。

第1章 エピローグ（後書き）

第1章 旅立ち 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8792x/>

魔王で吸血姫ですが勇者と旅をしています

2011年11月18日01時23分発行